

# ヨハネの黙示録 連続講解説教

始・二〇〇〇年四月三〇日

至・二〇〇一年六月一七日

辻 幸宏

本説教集は、二〇〇〇年・〇一年に上諏訪湖畔伝道所において説教を行い、説教要約としてまとめたものです。元来、このように説教集としてまとめる意思などはまったくなかったのですが、語った言葉に責任を持つことを考えた時、以前に語った言葉を隠しておくのではなく、公表し、読んでいただくことが必要かと思ひ、大宮教会小会の了承を得て、印刷する決断しました。

今後順次、他の書簡の説教集を印刷していく予定にしています。  
個人において聖書を読む時、本説教集を共に読んでいただければ幸いです。

なお、説教には日付けを入れておきました。時事問題等は現在とは異なった状況にあるものもあるからです。

既刊	共同書簡一	ヤコブの手紙
	二	ペトロの手紙一
	三	ペトロの手紙二
	四	ヨハネの手紙一・二・三・ユダの手紙

二〇二〇年一二月

辻 幸宏

今日からヨハネの黙示録を学びます。黙示録は、解釈が難しく、説教等にも取り上げられることが少ないかと思えます。私も十分に理解したから黙示録を取り上げるのではなく、御言葉から聞き、様々な神学者の意見を聞きつつ、神のお語りくださった真実を探り、語っていきたいと思います。

黙示録の解釈が困難な原因は、象徴的な数字や幻などが多くあるからです。そして黙示録全体が、何を意図して書かれたかを理解することが難しいからです。大きく分け四つの解釈があります。

① 過去主義・一世紀における、ローマの迫害が記されている。

② 歴史主義・現代・未来に至る歴史について示されている。

③ 未来主義・終末的な出来事が語られている。

④ 精神主義・個人の問題・迫害に対する指針が語られている。

しかし黙示録が誰に対して書かれたのかを知ることにより、その答えのヒントを得ることが出来ます。ヨハネがこの手紙を書き送ったのは西暦九〇年代であり、相手はアジア州にある七つの教会です（一章四、一一節）。この時代、ネロ帝（五四〜六八年）、ドミティアヌス帝（八一〜九六年）の迫害があります。使徒たちが相次いで殉教し、皇帝礼拝が強制されていきます。手紙の書き送られたアジア州の教会もまた、ローマの属州であり、迫害の影響を大きく受けていました。かつこの手紙を読む信徒たちは、決して神学者ではなく、迫害の中、信仰を守るために戦っている一信徒です。文字の読めない人たちも手紙を読み聞きました（一章三節）。彼らも、手紙より、迫害の中戦い、キリストの勝利の望みを持ち、勝利の確信を持ち続けることが出来ました。

だからこそ、私たちも黙示録から終末における神とサタンとの戦いを読みとり、神の勝利と神の民に与えられる祝福を読みとることが求められています。聖書の御言葉は、二〇〇年前の読者に語られた言葉ですが、かつ私たちに語られた神の御言葉です。私たちもまた信仰のために戦い、神の勝利の確信を持ち続ける希望が、黙示録より与えられます。

黙示録を記したのは、三位一体なる神です（一章四〜五節）。

① 父なる神は、今おられ、かつておられ、やがて来られる方です。これは出エジプト三章一四節「わたしはある。わたしはあるという者だ」と同じ意味です。時間を統治される神は、大迫害の中でも、なお統治しておられます。ここにキリスト者の平安が与えられます（参照・一章八節、一章一七〜一八節、四章八節、一一章一七節、一六章五節）。「わたしはアルファであり、オメガである」も同様の意味です。

② 聖霊・「玉座の前におられる七つの霊」と語ります。七つの霊とは、完全数を示す七であり、「完全な霊」として聖霊と読むことができます。

③ イエス・キリスト・一章四〜五節には、預言者・祭司・王としての仲保者キリストの三職が示されています（ウエストミンスター小教理問二三〜二六）。一「預言者」神の存在・人間の罪・救いを啓示する証人としてのお姿。二「王」地上の王たちの支配者。迫害を企てていきます敵たちも、主の支配下にあります。三「祭司」神の救いに与るために、私たちが包んでいきます罪が赦され、律法を遵守する必要を、キリストは満たしてくださいました。そして、このキリストが再臨してくださいます（一章七節）。神のご計画は、破壊ではなく、確実に勝利へと向かいます。この勝利を獲得してくださいるために、キリストは再びこの世に来てくださいます。この時、すでに墓に入っていた者も、キリストのように復活し、罪の赦しが宣言され、神の国に入ります。ここに迫害の中にある信徒に、生きる希望を与えます。そして、この時、なおも地上の欲を求めて歩んでいる者たちは、悔い改める余地はなくなりません。

黙示録は、神の奥義の覆いが取り除け、幻によって明らかにする書物です。従って黙示

録は、終末の恐ろしい預言ではなく、救いの喜びに満たされる約束が語られている希望の書物です。これから、一緒に読んでいきたいと思えます。

## 「永遠に生きる方の言葉」

### イザヤ書四一章一〜一六節、ヨハネの黙示録一章九〜二〇節

二〇〇〇年五月七日

ヨハネに神からの啓示があった主の日でした（一〇節）。この当時ローマ帝国は、キリスト教徒に対して大迫害を行っていました。従ってキリスト者は散り散りバラバラになり、礼拝することも困難でした。ヨハネがパトモス島に居たのも、裁判で流刑されたためです。主は主の日に啓示してくださいました。私たちも主の日に礼拝を献げるのは、自分たちの意志ではなく、神から私たちに与えられた祝福です。

そして、私たちは神からの啓示があり「霊」に満たされます。新共同訳聖書では「霊に満たされたから神の声を聞いた」と訳しますが、ギリシャ語では「霊に満たされた」と「神の声を聞いた」とことは同じ時制です。主の御言葉を聞いた者は、御霊に満たされ、力づけられ、主と共に戦う力が与えられます。キリストを信じ、信仰を保ち、キリストを告白するために戦う力は、自分の力で得るのではなく、主の日、御言葉の前に置かれた私たちに、主によって与えられます。

そしてヨハネは、七つの金の燭台と、人の子の姿を見ます。燭台は、主イエスもたとえ話で用いられますが、旧約聖書でも何度も記されています。出エジプト記の幕屋建設の指示（二五章三一〜三二節）、ソロモン王の宮殿建設の時（列王記上七章四八〜四九節）、ゼカリヤ書四章二節など。この燭台は、幕屋や神殿を建設するために必要不可欠ですが、旧約聖書で詳しく語られている意図は、黙示録ではっきりとします（二〇節）。燭台は教

会のことです。つまり社会という暗闇の中、教会は燭台において光を輝き続けます。

現代もまた暗闇です。少年による殺人事件やバス・ジャック事件は、日本社会にある暗闇を写し出したものです。教会は金の燭台に光を灯します。しかし、教会自らがその光を灯すではありません。この真つ暗な世に光を灯してくださるのはキリストです。教会はその光を世界中に輝かす場所です。そのキリストがヨハネの前に姿を現しました。

キリストはユダヤ人たちに十字架に架けられた時のような、犯罪者として裁かれていく弱々しい姿はありません（一三〜一六節）。まして、死して滅びた姿もありません。義・真実・聖・支配・統治を表す雄々しい姿がここにあります。ヨハネは、その前に立つことさえできませんでした。このお方が「最初の者にして最後の者、また生きている者です」（一七〜一八節、参照・イザヤ四一章四節）。

キリストは十字架の上へ一度は死を遂げられ、陰府に下られました（一八節）。しかしキリストは、死に打ち勝たれ、復活されました（四〜五節）。肉体の死は、魂の死ではありません。サタンによって遣わされたユダヤ人たちは、キリストを肉体の死に追いやって、魂まで陰府に送ることはできません。そしてキリストは、サタンに打ち勝ち、復活され、今もなお天におられます。

迫害の中にある教会の希望は、迫害により肉体の死を迎えても、キリストが復活されたように、キリスト者が復活させられ、神の子とされることにあります。そして迫害している者たちは、誰一人として、キリスト者の魂を陰府に落とすことはできません。最後の審判を行うのは、サタンや迫害する者たちではなく、キリストです。死と陰府の鍵を持つのは、最後の審判を行う力を持つておられることです。

そしてキリストは、七つの教会と共に今、ヨハネの前におられます。私たちの教会と共に、キリストは現臨しておられます。この世にある教会には様々な問題があります。私たちの教会もそうです。しかし教会である燭台に火を灯すのは、キリストご自身です。神は虫けらのような私たちを救ってくださいます（イザヤ四一章一三〜一四節）。燭台の近く

にある七つの星。これこそ、靈的に教会を統治しておられる方、つまり終末的な戦いの中にあるキリスト者を、御霊により統治し、立たせてくださるキリストご自身です。

主の日に、私たちが教会に導いてくださり、生きる力と希望をお与えくださる神がここにおられます。私たちはこのことを聖餐の礼典で確認します。主により与えられた恵みに感謝したいと思います。そしてどのような状況の中にあっても、教会が闇を照らす燭台の火として灯され続け、私たち自身が地の塩、世の光として歩むことができよう、主からの恵みに与り続けたい。

### 「初心に戻れ！」 創世記二章一五〜一七節、ヨハネの黙示録二章一〜七節

二〇〇〇年五月一日

今回から、二章に入ります。教会は、ウエストミンスター信仰告白二五章一節にある通り、頭なるキリストのもとに、過去・現在・未来を通じて神によって選ばれた神の民たちが集まることにより、形成されていきます。そこに純粹にキリストの働きと聖霊の充滿があると、罪の混入する余地のない教会が形成されます。しかしこのような教会は、キリストの再臨を待たなければなりません。

現実には多くの問題があります。そこに理由があります。人間に罪が混入するからです。アダムとエバが、神の約束（創世記二章一五〜一七節）を果たすことができなかつたからです。クリスチャンは、神から罪の赦しが与えられましたが、地上の生涯にあつてはなおも罪人です。罪の赦しの完成は、肉体の死とキリストの再臨を待たなければなりません。教会に罪が入ったり、教派が形成されるのは、すべて罪が原因です（参照・ウエストミンスター信仰告白二五章四〜五節）。

黙示録七つの教会として例外ではありません。二〜三章には七つの教会のことが記されています。

エフェソ教会は、アジア州の中でも中心的な都市です。教会はパウロの伝道により建てられ（参照・使徒一八章一九〜二一節、一九章一〜一〇節、エフェソ書）、教理をしっかりと中心した純潔な教会です（二節）。異端に対しても戦うことができなかつた（六節）。教会の純潔を守り、誤りを正し、戒規を執行することができるのは、教会がキリストの信仰に立ち続けているからこそです。これらは賞賛に値します。しかし、教会は愛を失いました（四節）。キリストに対する愛であり、兄弟に対する愛です。靈的熱心から遠ざかったためです。「死した正統主義」です。

これは今の改革派教会の姿であり、私たちの教会の姿そのものではないでしょうか？そして私の姿そのものです。改革派教会では、信条を整え、教会規定を整えました。そして信仰の宣言を告白し続けています。そして東部中会はその延長線上として、「五五周年宣言」と「長期計画」を採択しようとしています。形は受け継いでも、魂・愛が乏しく、現段階では中身の無い内容となっています。ここに問題があります。

今、私たちは現実の問題を認め、悔い改めて初心に立ち戻ることが求められています。教会に來始めた頃、聖霊に満たされ燃やされています。しかし、礼拝に出席することが習慣化し、惰性・義務化しています。ここに愛が無くなる根本的な原因があります。だからこそ、キリストは初めの頃を思い出し、立ち戻るように命令されます。そしてさらに、もし悔い改めなければ、わたしはあなたのところへ行つて、あなたの燭台をその場所から取りのけてしまおうとも語られます。燭台を取りのけるとは、キリストがお立てくださった教会が、消滅することです。

愛が失われることは、教会にとつても大きな問題です。教会に牧師がいること、礼拝堂があること、それだけでは教会は安泰ではありません。キリストにつながる愛が失われれば、教会は滅びます。だからこそ、御霊を通し祈り続ける必要があります（七節）。

一節でキリストは、ご自身を紹介する言葉として、「右の手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方である」と語られます。キリストは、天の御座に座されておられますが、今、靈的に教会と共におられます。そして聖霊を通して、その恵みを私たちにお与えくださいます。御言葉と共に、御霊によるキリストとの交わりが強まらなければ、愛は失われてしまいます。御言葉が解き明かされ祈りが行われることにより、キリストによる勝利が与えられます（七節）。善悪の木の実を食べて以来、死ぬ者とされていた人間は、再び命の木の実が与えられ、永遠に神と共に生きるものとされます。

「あなたは豊かだ！」 ダニエル書一章六、二一節、ヨハネの黙示録二章八、一一節

二〇〇〇年五月二一日

皆さんはどのようなことにおいて豊かさを感じられるでしょうか？ 日々の生活の中にあつて、ちよつとしたことでも、喜び、豊かさを感じることもあります。私も子供が産まれて以来、喜び・豊かさを感じる事が多くなりました。ウエストミンスター小教理問一「人のおもな目的は、何ですか」。答「人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことです」。御言葉の語る豊かさは、この問答に通ずるものがあり、苦しみ・貧しさの中に、なお備わっている豊かさです。

スマイルナ教会は、黙示録にだけ出てきます。スマイルナは、エフエソと競う程の大都市であり、陸上交通、海上交通の要所として栄えた町です。BC一九五年にはローマの女神のための神殿を建設していますことから、ローマに忠誠を尽くし、ローマの保護のもと、建築・医学・科学、商業などの栄えた町です。

このスマイルナ教会は「苦難と貧しさの中にある」（九節）。「苦しみ」とは、激しい苦

しみであり、「貧しさ」も単なる貧しさではありません。ギリシャ語の派生語には「遺体・死体」と言う意味があります。つまり、死人のように見捨てられた乞食のような貧しさがこの教会にありました。この点日本の教会も似通っていますが、スマイルナは日本以上です。

この理由は、①奴隷を中心とする下層階級の人々が多かつたこと。②キリスト者として贅沢な生活を求めなかつたこと。③キリスト者の故に略奪・強盗に遭っていたことです。特に③の故です。教会は、ローマの人々からも、離散ユダヤ人からも、激しい迫害にあつていました。十日の苦しみ（一〇節）とは、ダニエル書において、ダニエルたち少年が体験した苦しみの時と重ね合わせる事ができます。ダニエルたちは、野菜と水だけの食事でしたが、神の御計らいと恵みにより、健康が保たれ、また知恵と才能に恵まれました。黙示録が語る十日もまた、苦しみの期間が「十日」という時間を示しているのではなく、神からの御計らいと恵みの中にあることが示されています。従つて、たとえ迫害の期間がこの世にあつて長い期間続いたとしても、迫害の故に殉教の死を遂げたとしても、神からすればわずかな期間です。地上の生涯は、八〇年程度ですが、キリスト者には神より命の冠・永遠の生命が与えられています。

私たちの求める豊かさはここにありません。地上の生涯の富は一時的であり、天国に持つていくことはできません。しかし人間の魂は、肉体的に死を遂げても、生き続けます。この世の生活がすべてではありません。富は必要ですが、それをすべてとして生き、共うい得ることが目的化してはなりません。真の豊かさは、キリストの再臨によりもたらされる神の国にあります。神の国の統治者は、「最初の者にして、最後の者である方」です（八節）。たとえ地上の生涯において富を得て豊かな生活を送ったとしても、最後の審判において、第二の死（つまり魂の死）がもたらされず（一一節）。これが永遠の裁きです。キリストは、一度は十字架に死を遂げられましたが生きておられます。私たちは地上での生活にあつて、激しい迫害にあり、殉教しようとも、豊かであり続けることができます。

ます。人間の力は、肉体は殺せても、魂は殺すことはできません。

「サタンの王座にある信仰」イザヤ書五六章一〜八節、ヨハネの黙示録二章一二〜一七節  
二〇〇〇年五月二八日

諏訪に住むキリスト者にとつて、御柱祭や地域神社の祭りとの関わりは切実な問題です。キリスト者の人口が少ない日本社会では、こう言ったことは避けて通ることのできない問題です。森首相の「神の国」発言や日の丸・君が代の問題など、私たちは至る所で信仰が問われ、信仰の戦いが強いられます。

ペルガモンもまたこういった問題を抱えていました。この町は現在でもベルガマという地名の観光地として有名です。ペルガモンはBC一三三年にローマの属国となり、それ以来、文化・宗教・芸術の中心地でした。宗教的にも、ゼウスの大祭壇・アテナの神殿・医学の神アスクレピオスの神殿等があり、皇帝崇拜も含め、偶像崇拜のメッカでした。だからこそ、ペルガモン教会は教会の存在自体が戦いでした。外的な迫害もありましたが、問題は社会・地域との交わりにおける宗教的な戦いです。職場や地域にはそれぞれ宗教があり、それを拒否すれば、それらのコミュニティから閉め出されます。ここに信仰の戦いが生じます。アンティパスは、信仰を貫くことにより殉教しました（一三節）。こういった状況は、まさに日本社会の問題であり、御柱祭や日の丸・君が代の問題です。

さらにペルガモン教会の戦いは、教会の中に目を向ける必要があります。エフェソ教会は、ニコライ派（現在では教義を知ることができない）の異端の教師が教会内に入ってきた時、戒規を行い、霊的な純潔を守りました（六節）。しかし、ペルガモン教会はその戦いができません。

聖書は、彼らが旧約の預言者バラムのような存在であると語ります（民数記二二〜二四章）。初めにモアブ王バラクがバラムの所に来て、「エジプトから上ってきた一つの民がいます。…今すぐに来て、わたしのためにこの民を呪ってもらいたい。そうすれば、わたしはこれを撃ち破って、この国から追い出すことができるだろう。…」（民数記二二章五〜六節）と語ります。つまり「イスラエルを呪って欲しい」と頼みます。しかしバラムには神が共におられ、バラクの所へ行かせることを拒まれます。しかし最後には主の言葉に逆らい、バラクを祝福する言葉を語ります。すると、イスラエルがシテイムに滞在していたとき、民はモアブの娘たちに従って背信の行為をし始め、娘たちは自分たちの神々に犠牲をささげる時に民を招き、民はその食事に加わって娘たちの神々を拝んだりしました（二五章一〜二節、三一章一六節）。バラムは、イスラエルを神に対して不忠実になるよう誘惑し、誤った神札拝に導き、モアブ人の遊女たちを偶像と偶像の献げ物に道を開く器となりました。

バラムのようなニコライ派の教師がペルガモン教会の中にもいました。ここで問われるのは、私たちの第一戒における神観です。主は全知全能です（一三節）。バラムがバラクの所に行こうとした時、神はロバを用いてモアブ王バラクの所に行かせることを拒もうとされた方です。

キリスト者は、キリストの十字架による勝利により、神の恵みにありますが、弱い存在であり、ついサタンの誘惑により神に背いてしまいます。日本でも半世紀前の教会の罪を忘れてはなりません。神社参拝が求められ、行いました。礼拝においても国民儀礼が求められ、宮城遙礼・御真影礼拝・君が代斉唱などが行いました。「神社は宗教ではない」との言葉に真理が隠され、日本の多くの教会は、信仰の戦いを行うことができずして、今改めて同じ信仰の戦いが強いられようとしています。

私たちが恐れるべきは、肉の命を殺そうとする人々ではなく、鋭い両刃の剣を持たれた、

魂を裁かれる方です（一二節）。今、私たちは悔い改めが求められています。これは自己保身ではなく、主によって罪赦された者として、主を証しする者として歩むためです。

主の御言葉に聞き従う者に、出エジプトのイスラエルのマンナのように、霊的なマンナが与えられます（ヨハネ六章四八〜五一節）。主の御言葉を聞き信じ続ける事は、永遠の生命そのものです。白い小石とは、いろんな解釈がありますが、勝利の白星が与えられた者には主の名の記された勝利の徴があります（参照・イザヤ五六章四〜七節）。主の約束を信じ、感謝しつつ、歩み続けましょう。

「偽預言者に注意しろ！」

列王記上二二章二五〜二九節、ヨハネの黙示録二章一八〜二九節

二〇〇〇年六月四日

テИАテイラは、小アジアの内陸でペルガモンよりも南東約六〇kmにありました。こはリュコス川の流域であり、ペルガモンとサルデイスを結ぶ町として、ローマ軍があり、また工業・商業が栄えていた町です。

この町については、使徒一六章一四節で記されています。パウロたちが伝道旅行でフィリピに到着した時、この町で最初に洗礼を受けたのが、テИАテイラ出身の婦人とその家族であったことが記されています。恐らく、この頃にテИАテイラ教会も建てられ、教会は四〇年位の月日を経ていたと考えられます。この間、教会は信仰的に成長しました（一九節）。エフェソ教会ですら、愛から離れ（四節）、信仰が継承されていく事は大変困難でした。しかしテИАテイラ教会は、信仰の継承がしっかりされ、愛や信仰から、奉仕が生じ、さらに奉仕を継続していくための忍耐が備わっていました（一九節）。私たちの目

指す教会は、このような姿です。人数が多くなってから教会形成をするではありません。会員一人ひとりが教会を建てていく思いと愛・信仰を持つことが必要です。

テИАテイラ教会は賞賛されつつも罪がありました。偶像崇拜を行うことを大目に見ていました（二〇節）。ここで出てくるイゼベルの名は、列王記上のアハブ王の妻イゼベルとも重なります。彼女はアハブ王に率先して偶像崇拜をさせ、自らもそのようにしました（列王上二二章二五〜二六節）。

テИАテイラ教会の女預言者イゼベルもまた、同じようなことを行っていたことでしよう。彼女は恐らく「偶像礼拝をしてはいけないと言われていますが、それがどのような危険があるのかは、それを実際に行わなければ、わからないではないか。偶像崇拜をした上で、危険であれば止めればよい」。このように語ったと思われる。ミイラ取りがミイラになることを願っていたのです。「自分はしっかりした信仰を持っていますから大丈夫だ！」こういった思いは危険です。ここに、人間の弱さがあります。いくら間違いだと気が付いても、繰り返し行っていくうちに、麻痺して、偶像崇拜を行ってしまいます。サタンはこの人間の弱い心理に、巧みに語りかけてきます。

しかし主は、このようなサタンの虜となっっています女預言者に対しても、忍耐強く悔い改めをお待ちくださっています。しかし、こういった者たちの行く末についても、聖書は語ります（二二〜二三節）。キリストの再臨の日に、彼らは、地獄に投げ入れられ、永遠に、体と魂との両方の言い尽くしえない苦痛をもって罰せられます（ウエストミンスター大教理問八九）。

ここで私たちは、こういった偽預言者の言葉に耳を貸さないことが求められます。確かに、偶像（神社・神道・諏訪大社・御柱）についての知識を蓄えておくことも、弁証の観点から必要です。しかし、実際にそういった宗教行為を行うことは、全く別です。主は十戒をお与えくださった時「あなたはいかなる像も造ってはならない。…あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。…」（出エジプト二〇章

四（六節）と語られました。なぜこれ程まで、主が偶像崇拜をきつく否まれたのかは、人間の心がそれだけ弱く・もろいことを、主は充分承知され、誘惑に陥らないようにとの愛から語られたのです。

そして主の愛は、あなたがたには別の重荷を負わせない（二四節）とお語りくださいます。これ以上の重荷（主の教え）はありません。つまりただ御言葉に聞き従えばよいのです。御言葉にこそ真理があるからです。そして信仰により、主の勝利（一八節）が与えられます（二六（二七節））。私たちには、どのような困難な中にも、主の守りと勝利が与えられています。主の恵みに感謝し、主の勝利に与る者とされていますことに感謝して、パンと杯の礼典に与りたいと思います。

「目を覚ませ！」 イザヤ書四章二（六節）、ヨハネの黙示録三章一（六節）

二〇〇〇年六月一日

今日は、ペンテコステ（聖霊降臨節）です。復活節から五〇日目にあたり、主イエスが天に昇られる時にお約束くださった聖霊が、私たちに与えられたことを記念する日です。その時以来、今も聖霊なる神が、私たちと常に共にいてくださいます。聖霊が今もなお私たちの内に働いてくださっているからこそ、私たちが、主を知り、信じ、求めていくことができます。

黙示録もまた神の七つの霊があることを語ります（一節）。「七」は完全数であり、すべての教会に聖霊が臨在してくださっていることを示します。聖霊が教会と共にあることは、同時に神が教会のことのすべてをご存じであることを示しています。聖霊は、父なる神と私たちを結びつける絆だからです。

最近、キリスト教国と言われています国でも犯罪が増えています。これは、「見つかれば、犯罪を犯しても罪にはならない」という思いがあるからです。確かに社会的に裁判は、物的証拠と証人の証言、自白などがなければ、罪に定められることはありません。しかし神は、「わたしはあなたの行いを知っている」と語られます。私たちが「正しい、潔白だ」といくら語っても、隠れたことを見られる主の御前に立った時に、同じ事を主張することはできません。罪は、聖霊を通して神がすべてをご存じであられることを忘れた時に、行われます。

神はサルデイス教会に対して、「あなたは…：実は死んでいる」と語られます。もちろん霊的な死です。聖霊を忘れた教会は、霊的に死んでいます。偶像崇拜・不品行に妥協したからです。

サルデイスは、町が岩壁に囲まれ「敵の侵略はない」と、人々は安住していました。しかしBC五四九年ペルシャ王クロソス、BC二一八年シリア王安テオコス三世によって侵略されました。これは人々の油断からです。同様に、サルデイス教会は、クリスチャンであることに安住していました。教会は迫害もなく、信仰の戦いありませんでした。彼らは自分たちの信仰が立派だから迫害がないと思っていました。しかし、迫害するだけの価値がなく、異教徒と同じ生活をしていたため、迫害もなかったのです（二節）。だからこそ神は、彼らに「目を覚ませ」と語られます。サルデイス教会の信徒は、福音宣教がなされた当初の信仰、つまり聖霊の充滿した救いに感謝する姿はなく、「クリスチャンだから救われている」と信じ、自分勝手な生活をしていました。

神は彼らに対して、悔い改めを求められます（三節）。戻ってくる時を待っておられます。エフエソ教会が「初心に戻れ！」と語られていたように（二章五節）、悔い改めて御言葉に聞き続けることを求められます。

私たちがキリスト者であることは、キリスト者であり続けることです。私たちはサルデイス教会のように、全く弱い存在であり、御言葉から離れると罪に満ちた生活を送る者と





皇太后の逝去で自粛ムードがありますが、その中、「天皇はひとりの罪人であり、神ではない」ことをはっきり告白する信仰が求められています。

私たちの教会は、確かにミクロな存在です。しかし、私たちの信仰が主によって強められることにより、「伝道所だから」と言った言葉は語らず、教会を建て上げていくために何が求められており、またミクロな私たちに何が可能であるかを探っていく必要があります。

主は、天国の門の鍵を開けてくださった者に、素晴らしい約束をくださいました。①キリストを否定する者たちが、キリスト者に対してひれ伏します(九節)。これは最後の審判にもたらされる祝福ですが、強いては今キリストを否定している者も悔い改めに導かれ、信仰に入ることとも言われています。教会は、人数が多くなつたから信仰も成長するのではなく、信仰が成長することにより、その結果、実りとして数的にも成長します。②試練に耐えられる信仰が与えられます(一〇節)。人間の力ではサタンには勝てません。主に委ねることです。③天国に私たちの名が書き記されています。ここに主の名があり、約束があります。これが消される心配はありません。私たちはすでに主のものであり、神の救いと祝福に与るための一切のものが与えられ、約束されています。感謝して、主の御言葉に聞き従い続けたい。

「あなたは惨めだ！」 ホセア書一二章一〜一五節、ヨハネの黙示録三章一四〜二二節

二〇〇〇年七月二日

「あなたは、冷たくも熱くもない。むしろ、冷たいか熱いか、どちらかであつてほしい」(一五節)は、有名な聖句です。

日本人は、「玉虫色の決着」で言われる通り、物事を濁し、曖昧なままで片付けることが多い民族です。そういった意味では、日本人は生ぬるさを持った民族であり、私自身、そういった性格を持っています。

ところがここで言われているのは、性格や感情の意味でのなまぬるまきではなく、信仰的な事です。この言葉を語られるキリストは、「アーメンである方、誠実で真実な証人、神に創造された万物の源である方」です(一四節)。「アーメン」は、本来はヘブライ語で「確かに・その通りです」と言う意味があります。ここでは次の「誠実で真実な証人」は、父なる神のご計画が歴史において実行されていく時の証人であり、「アーメン」はそのことを二重に語っています(IIコリント一章二〇節)。そして「神に創造された万物の源である方」は、三位一体の第二人格・御子のご性格が語られています(コロサイ一章一五〜一八節)。

※ ラオデイキア教会ではコロサイ書は読まれていました(コロサイ四章一六節)。キリストは、今も私たちと共に臨在しておられます。そういったお方が、「では、あなたたちはどうであるか」と問われます。信仰的ななまぬるさ(一六節)は、熱心に神に仕える者でも、熱心に神を否定し信者を迫害する者でもありません。いい加減な形だけのキリスト者のことです。この理由は、満ち足りていたからです(一七節)。ラオデイキアは、金融(富節)・商業(毛織物)・医学的(目薬節)に盛んで裕福な町でした。AD六〇年頃に起きた大地震でも、ローマからの援助を全く得ることなく、自力で町の復興を成し遂げました。経済的な自信と誇りがあつた町です。ホセア書は、イスラエルの民が、財産を持つたため、商業・文化を誇り、人をだます事により、神を忘れ、補囚に遣わされる者となることを語っています(一二章八〜九節)。

ラオデイキアも、神にすべてを委ねて歩む姿はなく、形だけ信者として生活をしていました。だからこそキリストは、自分自身のことを全く理解していない者として「惨めな者……」と語られています。地震によって破壊されたラオデイキアは、神の力により、人間

の手によって造られた物はいつさいが破壊されたことを知っていたはずです。神戸の大震災も同様です。高速道路やビルが崩壊しました。しかし、今では立派なビルが建ち誇り、自分たちの力を誇っています。つまり、人間は本来の自分自身の存在である小ささ、はかなさ、弱さを忘れていきます。

ここでキリストは、三つの事を語ります。

①ラオデイキアの金融における裕福さに対して、「あなたは貧しい者」と語り、火で精錬された金を買うよう勧めます(一八節、参照・Iペトロ一章七節)。物質的な富ではなく、真の霊的な富を、御言葉から得る必要を語ります。

②ラオデイキアの毛織物産業の発達に対して、「あなたは裸の者」と語り、白い衣を買うよう勧めます(一八節)。立派な衣服で着飾っていても、罪を犯したアダムが、いちじくの葉を身につけたのと同じです。罪を聖めるには、霊的な神の義が必要です。

③ラオデイキアの医学(目薬節)の発達に対して、「あなたは目が見えない者」と語り、霊的な目が見えるように、聖霊の説き明かしの必要を語ります。

御言葉による養い、キリストの義を持ち、それらが聖霊の働きにより、日々強められていく必要があります。これらのことを通して、初めて信仰は成長し、神の国の平安が与えられます。ここに、私たちの本当の満ち足りがあります。

物質的な裕福な生活は、何にも頼る必要が無くなり、キリストの存在に気が付きません。キリストは、私たちの霊的な目が開かれることを待っておられません。主の晩餐によって霊的な交わりを確認してください(二〇節)。これは、同時にサタンに対する勝利の約束(二一節)です。

地上の満ち足りた生活にだけ満足することは、今だけの喜びであり、神の国では、ただ惨めな、哀れな、貧しいことです。だからこそ私たちは、御言葉に、神の義に、聖霊に熱くあり続けて行きたい(二二節)。

## 「天上の礼拝」

### エゼキエル書一章四〜二八節、ヨハネの黙示録四章一〜一一節

二〇〇〇年七月九日

地上の教会は何らかの問題を抱えています(二〜三章)。しかし信徒が、信仰を貫き、戦い続けることができるのは、天国を見据えているからです。四章で、主はヨハネに天上の教会の姿を見せています(一節)。ここは、神によって罪赦された者たちが約束された地です。しかし、天国の姿を地上の有限な言葉で表現する時、色と音によって表現する以外に、その栄光と威厳とさばきについて表現しようがなく、おのずと抽象的な表現となり、私たちが理解するのに難しい点が出てきます。しかし、天国は、「この後必ず起こること」です。従って、地上の生涯で苦しみつつ戦っています者にとって、四〜五章に天国について語られることは、慰めであり、喜びであり、励ましです。天国については、他にもエゼキエル書一章やイザヤ書六章、ヨブ記一・二章でも語られています。

二〜三節の玉座は、支配者・統治者としての主の姿が示されています。碧玉、赤めのう、エメラルドと言った宝石は、主の栄光の姿をこの世の宝石に例えつつ、その優雅さを描いています。そして虹は、永遠の契約のしるしです(創世記九章一三〜一六節)。また四節の二四人の長老については、旧約の一二部族の代表、一二使徒などが示されているとも言われていますが、全聖徒を代表とする御使いと解釈して良いでしょう。冠を持ち、王的権威を持っていたからです(参照・七章一三〜一四節)。五節の稲妻・さまざまな音・雷は、主の顕現を表す出来事です(出エジプト一九章一六〜一九節)。また七つの霊は聖霊です。ここでキリストについては記されていませんが、御父・御子・聖霊の三位一体の神がここに在しておられることが示されています。

六節以降の四つの生き物については、エゼキエル一章五〜六節でも記述されており、表

現の違ひは天上のものを表現したため起こったことです。四つの生き物は、それぞれ獅子は力、雄牛は従順に働く能力、人間の様な顔は知性を、鷲は敏速さを象徴するものです。以上のような天国の様子を、「これは素晴らしい」と手放して私たちは喜ぶことはできません。しかし、この四つの生き物や二四人の長老の行動を見る時、私たちに約束されている天国がどういった場所であるか、明らかにされていきます。

四つの生き物には、一面に目があることから、彼らは常に神の方を向いています。絶え間なく神に栄光を称え、讚美を行います。二四時間、三六五日休みなくです。私たちは一週の日、その内の僅か一時間半ばかり礼拝していません。居眠りや別のことを考えるもあるでしょう。これはこの世の働きの中、礼拝を献げている事から来ます（使徒二〇章九節）。しかし天国には労働も苦難もありません。玉座に向かつての礼拝だけです。これこそ、主が天地万物を創造し、人間を創造した目的の完成の姿です。しかし、人間に罪が混入したため、中断していたのです。主への讚美は、三位一体なる神が、全能者であり、時間的永遠の方であることを語っています。

また二四人の長老も主を礼拝します。彼らは、特別な特権が与えられており冠を持っていきますが、それはあくまで地上において一国を治めるために必要であったものであり、天上においては主のみが王の王であられ、必要ないために冠を投げ出します（一〇節）。

ヨハネはこのように、神の創造と支配と完成を前もって見せられました。それは、現在と将来において待ち受けています苦難が神の御座と無関係に起るものではないことを知り、キリストと共にある者たちが最終的に受ける栄光を見ることにより、ヨハネは苦難の中にあるキリスト者を励まし、希望を持って信仰を耐え抜くことができるように励ましています。

## 「キリストへの礼拝」

### 創世記四九章八〜一二節、ヨハネの黙示録五章一〜一四節

二〇〇〇年七月一六日

キリスト者は、肉体の死からの復活と神の国における永遠の生命を信じていますが、神の国の姿が鮮明になることにより、信仰も堅固になります。四章では天国の様子が語られました。五章では天国におけるキリストの姿が露わにされます。玉座におられる父なる神・神の七つの霊（聖霊）と共にキリストがおられ、三位一体なる神を考えておく必要があります。

天上の様子をうかがっていたヨハネは、父なる神の右の手に巻物があるのを見つけても（一節）。はじめは、天上の世界に圧倒されていましたが、次第に目が慣れ、巻物にも目が行くようになります。この巻物は、両面に文字が書かれています。これは、法廷で確認するため、文書の改ざんを防ぐ目的で、同じ文書が表面と裏面の両方に書かれていたと考えられています。これは、神のご計画に関することが記されている巻物です。この巻物が重要な証書であることは、七つの封印で封じられていることから理解できます。この封印が解かれられない限り、これを読むことはできません。人間にとつて、神のご計画は、歴史として示されるか、あるいは神からの直接の啓示がなければ知ることができません。従つて、この巻物もまた神の許しが必要なければ読むことはできません。

ヨハネは巻物を読むことができ泣きます（四節）。そこで巻物を開き、読むことができる方として示されたのがキリストです（五節）。ここではキリストは「ユダ族から出た獅子」、「ダビデのひこばえ」の二つの称号で語られています。前者は、創世記四九章（八〜一二節）にあるユダの祝福の約束から語られています。ユダが獅子の子とされたのは、力を秘められたキリストが約束された族長としての祝福の言葉です。そして、エッサイ（ダビデの父）のひこばえ（根節）から約束のお方が出ることにイザヤ一四章一節にも語られています。人々はそれを信じていました。その約束の成就としてキリストが示され

ています。ここで長老は、ダビデをイエスの根とは言わずに、むしろイエスをダビデの根と呼びます。このことから、神の御子としてのイエス・キリストが、ダビデよりも以前から存在しておられる永遠なる神として示されています。このように旧約の約束が成就された方として、そして唯一封印を解くことのできる方としてキリストが示されます。

神のご計画を、人間に啓示することは、キリストの預言者としての働きであす（参照・ウエストミンスター小教理問二四）。この御業は、旧約の預言者・キリスト御自身の口により、そして聖書に記されることにより私たちに示されています。ここで封印を開き終末の出来事を黙示の形で伝えるのもキリストの御業です。

キリストの御業の第二（祭司職）として、十字架に架けられ我々の罪の償いを成し遂げてくださいました（六節）。これこそキリストが神の御前に被造物と教会を代表する仲保者としての聖なる姿です。七つの角と七つの目は、悪魔への勝利と今もなお地上の悪魔に對する目が向けられ、キリスト者を守ってくださいさっている姿です。キリストは、天上にありつつ、地上の私たちに對する暖かい目があります。これが神の愛です。

キリストの御業の第三として、王職があります。玉座に座しておられる方の右の手から巻物を受け取る（五章七節）姿は、まさに王が即位し、全世界に對する支配権を父なる神から委ねられている王としての姿です。

まだヨハネは、巻物の内容が示されておらず、隠されていますが、キリストがすべての王の王として顕現する姿を見ます。この希望を抱くことは、地上で苦難に遭っています神の民が、天において今歡喜の声を挙げています多くの人々と一体であり、また地上の者たちも、この交わりの中に入れられることが示されています。キリストは、再臨してくださいさいます。その時に最後の審判が行われ、すべての悪魔は滅ばされ、キリストを信じるすべての者が天上の喜びと祝福を共にすることが許されます（八〜一四節）。これこそ、被造物である人間の最も祝福された姿です。だからこそ、地上の生活の中にあり、様々な苦難があるうとも、神の豊かな愛と守りと救いにあることを、日々感謝しつつ、日々の生活に

遣わされていきたい。

### 「聖なる者たちの礼拝」

#### 出エジプト記一九章一〜一三節、ヨハネの黙示録五章一〜一四節

二〇〇〇年七月二三日

四章に入り、ヨハネは天上に連れて行かれ、その様子を私たちに伝えました。玉座に父なる神が座しておられ、七つの霊である聖霊がそばにいます。そして五章に入り、巻物の封印を解き、巻物を読む方として、屠られた小羊であるキリストについて語られています。天国は三位一体なる神が集う場です。この天国で被造物は何をするのが、今日の御言葉に記されています。

四つの生き物と二十四人の長老は、豎琴と香によって小羊にひれ伏します（八節）。四章で天上にいた被造物たちは、玉座に座しておられる方に礼拝を献げていましたが、ここで小羊であられるキリストにひれ伏し礼拝します。仲保者であり巻物を私たちに語る方に礼拝を献げることにより、主なる神への讚美と祝福が行われます。ヨハネはこの様子を、旧約聖書において語られてきた神殿における神礼拝を典型として用います。旧約の礼拝では、豎琴をもったレビ人の合唱があり、神に向かって詩編を歌います。また祭司が燃える香の鉢の中に、強い香りと煙を漂わせて、聖所に持って行きます。それと同様に天上のキリストは、豎琴と香の鉢によって崇められます。また旧約の神殿で祭司が香をたくのは、単に自分だけではなく、民のためでありました。同様に、天上で香を献げる時、それは聖なる者たちの祈りであり、キリストの教会につながるすべてのキリスト者が献げる礼拝となります。私たちは、地上で神に礼拝を献げていますが、これが、神の玉座の前で長老

たちの礼拝によって繰り返され、強調され、そして輝きもたらされます。つまり、現在私たちが行っています礼拝は、天上において行われています礼拝が模範となり、天上での礼拝が私たちに示されることにより、私たちの神礼拝もまた、祝福されています。

礼拝で、新しい歌が歌われます(九節)。これは質的な新しさです(参照・新しい名(二章一七節、三章一二節)、新しいエルサレム(三章一二、二章二節)、新しい天と新しい地(二章一節)、すべてを新しくする(二章五節)」。神は、この地上の秩序とは質的にまったく違います、天における新しい秩序を確立されます。その天における新しい秩序がキリストによりもたらされ、それにふさわしい「新しい歌」が歌われます。つまりこの出来事は、神の創造と救済のすべての御業(キリストの贖い)が完成し、新しい天と新しい地が与えられた時の姿です。だからこそここに集う者たちは感謝を献げる歌を歌います(九〇一節)。

キリストは、屠られ贖われました。これは十字架の死と復活です。この御業は、神の民が罪の赦しを得るために必要な御業でしたが、ここでは「神のために」と記されています。私たちの罪の赦しは、私たちにとっては恵みですが、天上において神が栄光と誉れが讃えられるためになされます。そして私たちは、既に神の所有の民とされています。そして、神の所有の民とされた者たちが、神を礼拝するために教会を形成していきます。

またキリストの御業が、あらゆる種族と言葉の違う民・民族と国民のために行われたのは、バベルの塔(創世記一章)により、罰として分け隔てられたものが、すべて赦されたことを意味しています。創造の御業において神が本来意図していたことがここに完全に回復したことを意味します。

そして、主によって罪が贖われた私たちは、出エジプト(一九章)においてイスラエルに与えられたように、神に仕える王、祭司とされます(五章一〇節)。キリストの王国の民・万人祭司として、この世の人たちに対する執り成しと証しが行われ、地上を統治されます(五章一〇節)。

続いて、万の数万倍、千の数千倍、つまり無数の天使たちにより、小羊であるキリストへの讚美が行われます(一一〇一節)。屠られた小羊は、無抵抗に十字架に架けられ、一見弱々しいですが、この方こそ、力・富・知恵・威力に満ち、誉れと栄光と讚美されるにふさわしい方として、讚美されていきます。

## 「六つの封印」

ゼカリヤ書六章一〜八節、ヨハネの黙示録六章一〜一七節

二〇〇〇年七月三〇日

世界中には、今なお、貧困・自然災害・戦争などで喘いでいる人たちが多くいます。私は、こうしたニュースを知ると心が痛みます。六章では、こうした状況が、幻としてヨハネに示されています。

ヨハネは四章で、天上に連れて行かれ、玉座のお方やその周囲の様子を書き記しました。そして五章で、巻物と巻物の封印を解かれ読む方として屠られた小羊・御子イエス・キリストについて記しました。

黙示録ではこの後、七つの封印(六〜八章)、七つのラツパ(八〜十一章)、七つの鉢(一六〜一八章)と、終末的な災いが語られていきます。それぞれが完結した終末的な出来事です。そしてこれらは同じ形式で語られていきます。最初の四つの出来事があり、続く第五・第六の出来事で終末が近づいた如く災いが激化し、そして最後の第七の出来事で終末について劇的に語られていきます。古くからの時代から、この黙示録を読んできたキリスト教会では、その時代に起こった出来事を、黙示録に語られています出来事にあてはめ「黙示録のこの部分まで啓示は成就した。終末は近づいた」と繰り返し語ってきました。ペストの流行・第二次大戦・チェルノブイリ原発事故などです。しかしこれらの特定の事

件・事故を、幻である黙示録で解釈することは、非常に危険であり、誤って解釈することになります。キリストが十字架の御業を成し遂げてくださった時以来、終末の時代となっており、そういった時代に繰り返される出来事について、幻で語られています。

第六章で六つの封印が開かれますが、ゼカリヤ六章と似ています。ゼカリヤ書が空間的な広がりを見せますが、黙示録は時間的な展開で描かれています。弓は武力、勝利は人間的な名声が語られています。

第一の幻。白い馬は、侵略者を象徴しています。弓は武力、勝利は人間的な名声が語られています。

第二の幻。赤い馬は流血の象徴です。国家間の戦争、内戦の姿が語られています。

第三の幻。黒い馬は飢饉の象徴です。一コインクスは約一・一リットルであり、大人一人分の必要量です。一デナリオンが一日の賃金であり、これでは一家が食べていくことができませぬ。戦後の配給制度や闇市を思い浮かべることができないのでしょうか。

一方、オリーブ油とぶどう酒は贅沢品であり、貧富の拡大が鮮明となっていく様子が描かれています。

第四の幻。青白い馬は死にかかった病人の象徴です。死と陰府は、神の裁きによる滅びであり、この鍵はキリストが持つておられます(一章一八節)。

第五・第六の幻は次週に語ることにしますが、これらの幻のどこに神の恵みがあるのでしょうか？ 私たちは人ごとで済ませてはなりません。しかしここに大きな慰めも語られています。彼は冠を与えられました(二節)。大きな剣が与えられました(四節)。人を滅ぼす権威が与えられました(八節)。こういった出来事の責任は人間にあり、罪の故です。しかし主なる神はそれを許しておられます。ヨブ記では、ヨブが様々な災害に遭いますが、主はこのようにサタンに語ります。「彼には手を出すな」(一章一二節)、「命だけは奪うな」(二章六節)。主がサタンの業を許しておられるということは、ヨブは神によって守られているということです。同様に、終末的な出来事においても、主の守りがあります。クリスチャンだからといってこれらの苦しみから逃れることはできませんが、

約束の神の国が与えられる準備が行われます。そして、すべての神の民が、キリストの再臨と裁きにより、神の国に導かれます。例え、これらの災害によって墓の中に入ったとしても、天国に入れられます。私たちは決して棄てられることがありません。だからこそ、どのような困難な中にあっても主を信じて歩み続けることができます。神の御支配の下にあることに感謝しましょう。

「大いなる日が来た！」

ヨエル書二章一〇一節、ヨハネの黙示録六章一〇一七節

二〇〇〇年八月六日

小羊が第五の封印を開きます(九節)。ここでは地上の終末的な出来事ではなく、天上の様子が語られています。ヨハネをはじめとする主イエスの十二弟子は殉教したと語られています。また、戦時中日本のクリスチャンも信仰の闘いを行いました。多くの者たちは天皇を崇拜する偶像崇拜を行いました。一方、日本占領下の韓国・朝鮮のクリスチャンも神社参拝を拒否して多くの者が殉教しました。どの時代にあってもキリスト者への迫害は続いています。そしてこの御言葉には、これら信仰を守るために闘い、殉教していった人々について語られています。

しかしここでは、地上における痛ましい迫害の様子ではなく、天上において、父なる神の御座である祭壇の下で殉教者たちが集っている様子が描かれています。旧約聖書において地上の祭壇にいけにえとして獣の血がつけられました。彼ら天にある殉教者の姿は、祭壇のいけにえの血のように描かれています。これがキリスト者の死後の姿です(参照・ウエストミンスター小教理問三七)。

一方地上では、今なお、多くのキリスト者に対する迫害が続いています。日本において

も、戦前の歴史を繰り返すような政治の姿が見え隠れしています。しかし父なる神は、こ  
ういったことを忍耐をもって、見守っておられます。一見すると、サタンが勝利した時代  
の様です。

天上の殉教者はこうした事態に訴えています（一〇〇一節）。しかし主は、神の民が  
すべて満ちるまで、裁きを待たれています。主はあらかじめ定められた民をだれ一人とし  
て遣はれることはなさいません（参照・Ⅱテモテ二章一九節、ヨハネ一三章一八節、ウエ  
ストミンスター信仰告白三章四節）。迫害されることは辛いですが、しかし主はすべて予定  
された民を天国に導くことを約束してくださっています。このことは、今苦しみの中にあ  
るキリスト者にとつて、どれだけ励ましであり、慰められる御言葉でしょうか。

続いて第六の封印が開かれます（一二〇一三節）。ヨエル二章にもある主の目を迎える  
時の天変地異です。私たちは自然の秩序は当然の如く不変であると思っており、また自然  
科学の発達もこのことが前提にあります。科学技術の発達により、人間が自然を支配して  
いるかの如くになっているのは、人間の傲慢の姿です。そして終末の時には、こうした秩  
序はなくなりません。

自然の秩序がなくなると、すべての者が恐怖を覚えうろたえます（一五〇一七節）。こ  
うした状況では、王・大統領・首相と言った権威も身分も関係ありません。天変地異がな  
ければ安泰であった者たちも、今ある権威・身分も無意味となり、無価値となります。

そしてこうした天変地異により、自然は人間の支配の元にあるものではなく、主がお創  
りになり、今なお支配しておられることが、すべての者に示されます。これは誰も耐える  
ことのできない裁きの時です。誰もこの出来事に対して立ち向うことはできず、逃げまど  
うだけです。

こうした神の裁きは、天地万物を支配しておられる神の存在を忘れ、自分の益になるこ  
とばかりを求めてきた人間の罪に対しての裁きです。しかしこの大いなる日は同時に、主  
の豊かな恵みが神の民に対して示される時でもあります（マルコ一三章二四〇二七節）。

私たちクリスチャンも、同じ苦難を体験しなければなりません。また、第五の封印の時  
のように、特別な苦難もあります。しかし、次の七章でも明らかにされるように、神によ  
って捉えられた神の民には、永遠の救いが保証されています。大いなる日は、キリスト者  
にとつては恐怖の時ではなく、神の国がもたらされる喜びの時です。これは、私たちの行  
いの結果ではなく、ただ主イエスの十字架の御業により、すでに罪が赦された故に与えら  
れた主の恵みによって与えられる祝福です。

今から聖餐の聖典に与りますが、神がお与えくださった恵みに感謝して、与りましょう。

#### 「十四万四千人」 エゼキエル書九章一〇一節、ヨハネの黙示録七章一〇八節

二〇〇〇年八月一三日

六章で、六つの封印が開かれ終末の様子が語られてきましたが、第七の封印が開かれる  
のは八章になります。そして七章では終末時のキリスト者について、語られています。

黙示録が記された当時はまだ地球が丸いことなど知られていませんでした。当時の世界  
像が七章一節で語られています。これは、エゼキエル七章二節、三章九節、イザヤ一  
章一二節、ダニエル七章二節、ゼカリヤ二章六節などの旧約聖書記述に沿ったものです。  
この大地の四隅に大地と海とを損なう四人の天使が現れます。六章一五〇一六節で語られ  
る人々の恐怖の姿です。

しかしヨハネはもう一人の天使を見ます（二〇三節）。この天使は、神の僕に刻印を押  
す任務が与えられています。つまり、キリスト者となり罪赦され天国に行くためには、神  
からの召しが必要ですが、私たちは信仰を告白して洗礼を授かりますが、これは一〇〇%私  
たち自身の意志ですが、それは一〇〇%神の恵みによる神の御意志の故であり、ここに聖



霊なる神の働きがあります。

私たちに神の僕の刻印が押されるということは、神が私たちを神の子とするための契約書をあらかじめ用意されており、そこに神が署名・捺印をしてくださることであり、私たちはそのことを洗礼を授かることにおいて確認します。この刻印の押された契約書の故に、地上の生涯が守られ（参照・出エジプトの過越、出一二章一二〜一三節）、天国が約束されています。

神の民が集められるまでの裁きの延期は、六章一一節を裏付けており、エゼキエルが語るように、他の人々は神の呼びかけに対しても、自らの罪を悔い改めないため、神の裁きに遭います。神の民はすでに定められています。

ヨハネはその数を一四四、〇〇〇人と聞きます（四節）。神学者たちはこの数字を様々な解釈をしてきました。エホバの証人たちもこの数字を強調していました。詳しくこれらの説を考えることは無益であり行いません。ただ一つだけ挙げれば、イスラエルの一二部族からそれぞれ選ばれていますことから、旧約のイスラエルが再興されるという説もあります。しかし、この一二部族のリストにはダン族が省かれた代わりにヨセフの半部族マナセ族が選ばれていることより、ダン族が偶像崇拜に陥った（士師記一七〜一八章）ことから省かれていると考えられます。このことからすれば、ここで記されている一二部族は、肉のイスラエルではなく、霊的な罪の排除されたイスラエルの事が語られていると考えることができます。つまり天使に刻印を受ける者は、神の民としてのイエス・キリストの集会の民のことであり、この集会こそ神の真のイスラエル、まことの一二部族として示されています。神の刻印を受けることは、神の所有物となることであり、霊的に神とのつながりがあることを指し示しています。

さらに一四四、〇〇〇人も数字として厳格に考えるのではなく、黙示録特有の象徴的な完全数として考えることが必要です。黙示録には七、一二などの完全を象徴する数字がいくつも記されています。それらと同様この一四四、〇〇〇も、一二（完全数）×一二×一

〇（完全数）×一〇×一〇であり、神によって選ばれているすべての者と解釈できます。「あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数え切れないほどの大群衆」（九節）こそが、神の刻印が押されている人です。従って、一部の人が考えるように天国の定員が、一四四、〇〇〇人だと考える必要などありません。

ただここで語られていますように、神によって刻印が押されるべき人はすべて、神の御許に集められ、天国に入る特権が与えられています。そして、神を信じる私たちキリスト者は、終末の苦しみの中にあっても、主の特別な守りと祝福の中にあることに感謝しましょう。

## 「大群衆が集う場」

### イザヤ書二五章六〜一〇節、ヨハネの黙示録七章九〜一七節

二〇〇〇年八月二〇日

今日、私たちはA姉妹の転入が、主の御前で行われました。わずか一〇数名の私たちの教会にとつては大きな喜びです。

しかしこの教会でのみ礼拝を守っていますと、時として天国もまた、このように少人数の信者しかいないのではないかと思ってしまう。これは、日本の教会に共通にある問題です。しかしヨハネは「あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆がいます」と語ります（九節）。ここには無限の広がりがあります。私たちに約束されています天国とは、何も日本人の信者だけが集う場ではありません。

先日、東部中会信徒修養会が行われましたが、まさにここで記されていますような神の国の姿を見た思いがします。今回は、北米CRCのカルヴァン大学OBで形成された聖歌

隊約五〇人が来日し、修養会においてその素晴らしい讃美を披露してくださいました。言葉は違いますが、主の栄光を讃える讃美は、言葉の違いなど感じません。そして、讃美歌を東部中会の参加者と一緒になり讃美しました。国籍が違えば、民族も違い、言葉も違います。しかし、ここにはそういった違いは感じません。キリストにある一致を感じました。彼らは、日本を皮切りに、マレーシア、シンガポール、フィリピン、台湾と訪問して、讃美をし続けることを語っておられました。まことに主の栄光を讃えることにおいては、国境も、言葉の壁もないことを、彼ら自身もこの講演旅行において感じたことでしょう。

国籍、民族、言葉の違いは、バベルの塔（創世記十一章）を人間がつくり、神に近付き、神に代わろうとした結果、生じましたが、私たちは主のご栄光を讃美し、キリストにつながる神の子とされた時、こういった分断はなくなりました。そして、これが天国の姿であることを、ヨハネは語ります。

すべてのキリストにつながる民が、天国に集い、主の御栄光を讃えています。この数は、だれにも数え切れません。神のみがご存じであられます。八節までに記されていた一四四、〇〇〇人は、前回語った通り一二や一〇という完全数であり、無数の数え切れない人々が、天国に招かれ、主の御栄光を讃える者とされています。

そして、天国に入れられる大群衆が、白い衣を身に着けると語ります（九節）。白い衣とは、潔白を示す白であり、無罪が宣告されている証拠です。神の聖、神の義に適う者とされた証拠です。地上の生涯にあつて、神の御前に誰が無罪と宣言される人がいますか？誰もいません。しかし主なる神は、ご自身の召しにより大群衆の民を天国に導いてくださいます。

しかし、これは驚くべき奇跡であり、この恵みを忘れないように自覚させるために長老は語ります（一三節、一四―一八節）。大きな苦難を通ってきた者とは、すべてのキリスト者であり、私たちもその一人です。私たちが世の歩みの中、大小の信仰を貫く闘いがあります。しかし私たちの罪の故に真つ黒な衣は、小羊つまりキリストの十字架の御業によ

り、白くされました。それ故、私たちの罪はなかったものとされ、神の義・聖に適う者とされました。

さらにキリストの十字架の故に天国に導かれた大群衆は、天国に入れられ、昼も夜も永遠に神と共に祝福に与ります（一五節）。ここでは、もう地上の生涯のような信仰の闘いも苦しみも、キリストの罪への勝利の故にありません（一六節）。そして、命の泉、つまり永遠の生命と救いをもたらす永遠の源が大牧者であるキリストから与えられ続けます（一七節、イザヤ二五章八節）。

だからこそ、私たちを含めたすべての神の子たる大群衆は、主による救いと永遠の生命の喜びの故に、七章一〇節、一二節にある神の栄光を讃える讃美へと導かれます。私たちは、地上の教会で少人数ですが、天国にあつて、この大群衆と共に、主の御栄光を讃える者とされていることに感謝しましょう。

## 「聖なる者たちの祈り」

### アモス書九章一―九節、ヨハネの黙示録八章一―五節

二〇〇〇年九月三日

六章では六つの封印が次々開かれ、終末的な出来事が語られました。しかし七章では第七の封印が開かれず、天国における神の子たちの祝福に満ちた状態が示されました。これは終末的な恐怖と同時に、神の子たちへの約束を語ることで、私たちの目を神へと向かわせるものです。

そして八章になり、第七の封印が開かれます。ここで半時間ほどの沈黙の時間があります。「半時間」は、厳密な意味での三〇分間を意味するのか、一時間を完全な時間としてのしばらくの時間を示すか、はっきりしません。しかし、ここにしばらくの沈黙の時間が

ありました。沈黙は、人々に考える時間を与えるためです。

多くの神学者は、この沈黙を最後の恐ろしい出来事が起こるまでの備えの時であると語ります。ここに神の御支配があります。時を支配されるのは、主なる神であり、最後の審判もまた、神のご計画に従ってなされます。神が御意志を発せられるまで、すべての物事は止まり、沈黙が保たれます。未来のことは、奥義のうちに隠されています。その時が来て、初めて人間は神の恵みに満ちたご計画を知ることができません。しかし罪の中にある人間は、忙しい時、目の前にある事柄を一生懸命行い、沈黙の時があれば、先に起こることを計画・予想することに一生懸命になります。今の時を支配しておられる神を第一に考え、神の御旨を求めたことを後回しにしています。この時私たちは、神がすべてを支配しておられると口では告白しつつ、実際にはそうした信仰生活が行えません。

主の御支配と臨在が私たちのうちにあり、主は私たちを救いに導いてくださいました。だからこそ今の時も、主は最も良いことを、私たちに与えくださることを、信じ、祈らなければなりません。だからこの沈黙は、終末的な恐怖の準備の時ではなく、すべてを主に委ねて、祈る時です。

私は礼拝開始五分前に講壇に立ち、沈黙を保ち、礼拝の備えをします。この時間、私は、主がこの場に共におられ、ここに集う神の民に対して、主がご支配され、福音をお語りくださるよう祈り求めています。一人の罪人である私が語るのではなく、主が必要な言葉を私にお与えくださるようです。

そして、ラツパが鳴り響く前に、天の聖所では、神礼拝が行われます。終末的な出来事は、神・キリスト教会と反キリスト・サタンとの力の戦いですが、キリスト者の勝利は、キリスト者の一生懸命な活動によって勝ち取るものではなく、神から与えられる恵みです（三〇四節）。ここで天使たちに香が渡されたのは、自分自身の力により神礼拝を行うことなく、神の御前で、主の御支配の元で、主が礼拝を献げてくださることを意味しています。私たちの祈りは、香の煙のように、聖霊により、天にまで届き、今生きておられる主

に聞き届けられます。自らの欲を取り払った祈りは、天に届き、神の義に適った神の御業の遂行へと導かれます。

趙寿玉（チョー・スオク）という、日韓併合下、神社参拝を拒否したため、四年間投獄された女性がいます。神社を参拝せず、天皇を神と認めず、キリスト教信仰を貫いた人です。日本の支配下、同胞が次々と神社参拝していく中、神社参拝を拒否することができたのは、彼女が立派な信仰の持ち主だったからではありません。彼女の証言の中には、日々、恐怖に脅えていたことがつぶさに語られています。彼女は、神を信じて、他には神がいな

いと信じ、今ここに神が共におられ、必要を満たしてくださいました。そして祈り続けたのです。これが彼女の戦いの力となりました。私

私たちは、自分の力で信仰を貫き守り抜くことではなく、すべてを主に委ね、祈る信仰を持つべきです。

六節以降、終末的出来事が語られていきます。しかし、いついかなる時でも、主を仰ぎ見、主に祈り求める者に、主の守りがあり、神の国の祝福があります（七章）。アモス書九章八〜九節には、終末の時代、神の民としてのふるいにかかっても、神の子として、主の守りの中にあることが語られています。今から与る主の晩餐は、私たちが神の子であることを、パンと杯を通して、確認することができます。私たちの人生が、主の御手にあることを感謝し、すべてを主に委ねつつ、主へ祈り続けていきたいものです。

「天使のラツパ」 ヨエル書三章一〜五節、ヨハネの黙示録八章六〜一三節

二〇〇〇年九月一〇日

八章に入り、七人の天使によりラツパが吹かれ、新たな終末的な出来事が起こります。

第七の封印が開かれたことに続けて語られ、読む限り、時間的に六章の続きの様です。しかしこれらの出来事は、ヨハネが天で見た黙示であり、一つの出来事を違った角度から語っていると考えてよいでしょう。ヨハネの黙示録を読む時、らせん階段を登るように幻が行ったり来たりすることを理解しなければなりません。

ところで八章で見逃してはならないのは四〇五節です。聖なる者たちの祈りに続けて終末的な出来事が起こります。つまり終末的な出来事は、地上の歩みをしていきますキリスト者たちの祈りの結果として、神の御業が現れます（参照・マタイ一七章二〇節）。ダイナミックな御業が、祈りの結果として成し遂げられます。終末的な出来事は、キリスト者にも様々な苦痛や試練がもたらされますが、サタン・罪に対する勝利が、これらの出来事によってもたらされます。

これらは出エジプト記（七〇一―一章）のモーセによる一〇の奇跡と、重ねて考えることができます。例えば、第一のラツパが吹かれた時に雹と火が生じ、地上に投げ入れられた場面は、九章一三節以降で語られています。海の三分の一が血に変わったことは、七章一四―二四節に記されています。星が落ち暗闇になるのは、一〇章二一―二九節にあります。順番は異なりますが、両者を重ね合わせて考えることができます。

続けて災いがエジプトにもたらされたのは、エジプトの王ファラオが、かたくなになり、主の御旨にあること、つまりイスラエルを解放しなかったからです。これらの出来事は、ファラオの罪による刑罰としての意味合いがあり、エジプトに様々な災いがもたらされました。黙示録も同様です。黙示録の終末的な御業は、全世界に災いがもたらされます。これらの災いは、サタンに支配された人々にある罪に対する神の審判であり、また罪からの悔い改めを迫る時です。また、地上の歩む聖なる者たちの祈りが、聖められ、聖霊によって天の父なる神に聞き届けられた結果、神の御国が到来する課程においてなされる御業です。従って終末的な災いに対して、キリスト者は、目の前に現れる様々な出来事・災いに戦々恐々とする必要はなく、右往左往する必要もありません。私たちは既に、主イエスの

十字架により、罪の死からの救いが与えられ、永遠の生命が約束されているからです。

歴史的な出来事を黙示録の御業にあてはめることは、昔から行われてきました。二〇世紀でも、二回の世界大戦や広島・長崎の原爆などです。そして全世界で黙示録の実現であると騒がれた出来事として、一九八六年四月のチェルノブイリ原発事故があります。この事故は、ヨロツパ中で「黙示録（八章一〇―一節）の実現である」と騒がれました。この「チェルノブイリ」が「苦よもぎ」を意味するからです。しかしここでは、世の中を支配しています様々な罪が、苦い物に変化したことを示しています。

黙示録はこのように我々が今生きています歴史・自然の営みの中に世の終わりが深く食い込んでいますことを意識させます。しかし一つの出来事をもって、黙示録の実現であると語ることは、黙示録を読み誤ります。チェルノブイリ原発事故一つをとっても、「ヨロツパの人々はこれが終末的な出来事である」と語り、日本人はそのことをあまり感じませんでした。一つの事件・事故などによって判断することは、自分中心に黙示録を解釈することとなります。黙示録は特定の事件の預言ではなく、神の裁きとは何であるかを根本的に問うています。

しかし歴史を一切無視してはなりません。私たちの生活・歴史の中にある様々な出来事、例えば阪神大震災のような自然現象、環境問題としてはダイオキシンの問題、オゾンホール破壊の問題などにより、常に終末的な出来事の最中にあり、私たちもまた大きな罪を犯し、悔い改めが迫られています。

「不幸だ」（八章一三節）は、「わざわざいだ」（口語訳・新改訳）です。わざわざいは、サタンに与えられる刑罰であり、このことを通して、神の民とされた者たちには、神の国の祝福に与ります。祈りと神への礼拝を行い続けたい（参照・ヨエル三章）。

九月一日に予定されていた甲信地区一日修養会が無事に終了しました。修養会では、宗教改革者カルヴァンの生涯について小池先生より講演をしていただきましたが、カルヴァンはキリスト教綱要の終末論で、次のように語ります。「われわれの救いに関して……今まで述べて来たことはみな、心を天にまで引き上げなければ理解できないことです。すなわち、ペテロの語ったところによれば、我々は未だ見たことのないキリストを愛し、これを信じて『我々の信仰の結果』を得るまで、『言葉につくせない、輝きにみちた喜びにあふれています』（Iペトロ一章八〜九節）ようにならねばならない。幸福な復活について絶えず瞑想し続ける習慣のある者のみが、福音に十分に熟れた人といえるのです。」

黙示録を読み続ける時、カルヴァンが語るように、終末の後に訪れる、魂の救い、神の国の恵みの喜び満たされているならば、困難さの中にあっても希望をもって読み進むことができます。

九章一〜二節は恐竜が隕石落下によって絶滅したとされる自然現象のようです。しかしここには意味があります。この星に底なしの淵に通じる穴を開く鍵が与えられています。底なしの淵とは、最後の審判による永遠の死とつながっています。最後の審判の始まりです。

その時発生するのは、いなごによる災害です（参照・出エジプト一〇章、ヨエル一〜二章）。この地方は信州同様にいなごが日常的でした。しかしここでの災害は特別です。いなごがさそりのような力を得ているからです（三節、参照・列王上一二章一節、エゼキエル二章六節、ルカ一章一二節）。そしてこの時に現れたいなごの姿は、七〜一節で詳しく語られています。ここではまさしく力のないいなごが武装し、戦いを挑む姿が語られます。アバドン（一一節）は「滅び」であり、アポリオン（一一節）は「滅ぼす者」

です。

このようにいなごは本来の姿をまったく変えた、攻撃するものとして描かれています。ここで具体的に五ヶ月という期間（五節）が示されていますが、これは春から夏の終わりにかけて活動するいなご本来の姿（四〜八月）と重なります。人々はその期間、死にたいと思っても死ぬことができません。主は罪を示し、悔い改めを待っておられます。そして第二・第三の災いが続きます（一二節）。

しかし、いなごが災いを人々に行う時、神は一つの条件を出されます（四節）。神の刻印（七章二〜三節）が押された者は除外されています。この刻印は、創世記一七章では、割礼によって与えられる永遠の契約のしるしとされており、新約の時代（私たち）では洗礼に相当します。イエス・キリストの十字架を私たちの救いのためであったことを信じることです。こうして永遠の契約のしるしとしての神の刻印を受けた者は、神の一方的な恵みによって復活と永遠の生命が約束されています。

新約の時代Ⅱ終末の時代に生きる私たちにとって、まさしくカルヴァンの語るように、魂と肉体の復活を信じ、神の国のリアリティーが示されることにより、黙示録で語られています。災いに対しても、希望を持って歩み続けていくことができます。

## 「悔い改め」

申命記四章二五〜三一節、ヨハネの黙示録九章一三〜二一節

二〇〇〇年九月二四日

「悔い改め」という語は、日常生活では余り用いられていない言葉です。事実、企業のトップや政治家が謝罪する時には「遺憾に思う」と語ります。これは謝罪の言葉としては最も軽い言葉です。石丸新先生は、謝罪の言葉を軽い順に、遺憾・反省・自制・自責・悔

恨・悔悟・懺悔・悔改であると語っておられます。

悔改は、最も聖書的かつ包括的な語です。悔改あってこそ、真の謝罪は成り立ちます（参照・ウエストミンスター小教理問八七）。罪の自覚と、キリストにある神の恵みの理解とから、罪を悲しみ、憎み、罪を離れて神へ立ち返ることが生じます。

悔い改めとは、教会ではよく用いられる言葉ですが、非常に重たい言葉です。洗礼者ヨハネ（マタイ三章二節）も主イエス（マタイ四章一七節）も、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言って宣べ伝え始められました。私たちは今、悔い改めが求められています。そして主は、私たちの悔い改めを待ち続けてくださっています。第六のラツパが吹かれた時にもです。

すべての三分の一の人々が殺されるということは、第二次世界大戦のような悲惨な世界が起る終末の出来事です。ヨハネの時代の人々も、現実と照らし合わせ、そう考えました。当時ペルシャを支配していたパルティアとローマ帝国との間で激しい戦いをしていたからです（一四節）。

しかし別の見方をすれば、三分の二は残されています。二億の騎兵（一六節）であり、当時の全世界の人口二億と考えても、すべてが滅びることも考えられます。しかし神は「すべてを滅ぼす」とは語らずに、「三分の二の人々を残される」と語られます。つまり主なる神は、悔い改めようとしないう者たちに対して、なおも忍耐強く自分自身を見つめ、神を信じ、罪の告白と悔い改めの時を待っておられます。ここに人間に対する神の愛があります。

そして二〇〇二一節で、人間の持つています罪、つまり何について悔い改めるべきか、ヨハネは語ります。第一は、偶像崇拜であり、十戒の第一の板、つまり心をつくし、力を尽くし、思いをつくして、主なる私たちの神を愛する（マタイ二二章三七〇節）ことから離れていることです。そして、第六戒、第七戒、第八戒は、十戒の第二の板、自分を愛するように私たちの隣人を愛することです。

日本の社会は悔い改めることなく、「遺憾に思う」という言葉が頻繁に用いられますが、すべての人間に共通した特質でもあります。自分の罪を認めたくないのです。自分に非があつたとしても、認めることができません。これはキリスト者、キリスト教会もまた同様であり、真の悔い改めが迫られています。

日本の教会でも、第二次大戦中の神社参拝などの罪に対して、教会としての悔い改めは、ほとんどなく、最近になってようやく考えるようになってきた位です。これが罪人である人間が形成するキリスト教会です。

私たちは、自分の力で悔い改めを行うことはできません。それを率直に認め、私たちがキリストの十字架の御業によつて救いに入れられていることが、ただ神からの一方的な恵み（申命記四章二五〇三節）であり、神の刻印が一方的に押されたものであることに感謝したいと思います。そして最後まで、悔い改めを待ってください。神の愛に感謝しつつ、主への信仰を新たにしていきましょう。

## 「神の計画の成就」

アモス書三章一〇八節、ヨハネの黙示録一〇章一〇一節

二〇〇〇年一〇月一日

黙示録は、終末の時を黙示（幻）の形で表しており、とても抽象的です。私たちは黙示録を理解する時、言葉そのものを追うのではなく、テキストの語る方向性・意図を考えなければなりません。一〇章は、すぐに第七のラツパが吹かれることなく、終末的な災いを起こしておられる神が、どういうお方で、終末的な災いを通して、私たちに何をお語り

くださろうとしているかを、再確認しようとしています。六〇七節で、神は天地万物を創造し、さらにすべての歴史を計画し、御自身の内に秘め

ておられることを語ります。神は時をも支配されています。

私たち人間は、未来を予想・予測することはできません。預言することはできません。人間の予言や占いも、予想・予測の域を脱しえませんが、神はそのすべてをご計画され、知っておられます。そしてその時が来るまでそれらの出来事は秘めておられます。これは良い知らせであり、単に「告げられた」ものではありません。ましてや滅びの知らせでもありません。

そして、秘められた計画（奥義）は明らかにされます（ルカ八章一七節）。この計画は救いの計画です。アブラハムに始まるイスラエルの選び、御子イエスの十字架の御業、そして終末の裁きにおける神の民の救いまで、計画されていきました。これらが良い知らせとしてイスラエルに示されました。同時に罪の中歩む者に、罪の刑罰があることを語られ、悔い改めを迫られました。アモス三章は、救済の民とされたイスラエルが罪を繰り返して

いることを預言者アモスによって警告しています。黙示録も、終末に生きる民に対する悔い改めを求める言葉として語られています。神は救いという良い知らせを準備してくださっています（エフェソ一章三〜一四節）。裁きではなく、この救いを求めるように黙示録は語ります。

第七の天使のラツパが吹かれるまで、もはや時はありません。新約の時代に生きる私たちにとつては、すでに第七のラツパが吹かれる時が来ていると考えねばなりません。良い知らせが成就する時が近づいています。

ヨハネには秘められた具体的な、やがて到来する神の国の出来事が示されました（一〜五節）。しかしそれらは秘められています。救いに必要なことは、聖書を通してお示しくださっているからです。私たちは、「神のご計画が伝えられていなかったため、神に従わなかつた」という言い訳を語ることは許されません。旧約聖書を通して、イスラエルの罪が繰り返し語られ、神は悔い改めを迫られています。それを私たち自身の姿として、受け入れなければなりません。黙示録も然りです。

八〜一一節でヨハネは巻物を受け取り、食べるように命令されます。巻物を食すること、聖書ならではの表現です。神の御言葉を受け入れる者にとつて、この巻物は甘いのです。良い知らせだからです。神の救いに与ることの祝福の素晴らしさがここにあります。しかし、腹には苦いものです。このことに関して、二つの解釈が語られています。

第一に、私たち自身の持つている罪の故です。「腹」とは「内蔵」のことであり、「魂」のある所として語られています。私たちの魂は、罪の故に腐りきっており、神の御言葉がいくら入っても、それを受け入れることはできません。ここに人間の罪の本質が語られています。

第二に、神の御言葉に従う者たちの歩む道が、険しいことです。信じない人々からの様々な迫害や虐待があるからです。

どちらにしても、神の秘められたご計画が、今まさに成就する時であり、神がお語りくださっている罪の悔い改めを行い、キリストの十字架による救いを信じる時が来ています。そして、キリスト者である私たちは、困難な中であってもそれを証して歩むことが求められています。これはまさしく私たちにとつては、御言葉の蜜のような甘い福音によって、天国における神の祝福に与ることが約束されているからです。

「二人の証人」

ゼカリヤ書四章一〜一四節、ヨハネの黙示録二一章一〜一四節

二〇〇〇年一〇月一五日

最近、イスラエルとパレスチナの間に新たな衝突が起こっています。しかしこの問題は、アブラハムにまで遡る問題であり、聖書に密着した問題です。特に、ユダヤ人のエルサレム帰属意識を私たちは考えねばなりません。彼らは未だに主の来臨の日を待っています。

しかし、アブラハムが約束の地とされたエルサレムは、主イエスの誕生でその使命は終わりました。その使命とは、約束の地に救い主をお送りくださることにありました。そしてキリストは、神と神の民に対する仲保者としてのつとめ、つまり地上の生涯における律法のまっとうと十字架の贖いによって、罪に対する勝利を既にもたらしてくださいます。従って、新約の時代、キリスト教会の希望と愛は、エルサレムから解放され、神の国の到来へと向けられています。

ヨハネはエルサレムの神殿を見せられます(一〇二節)。旧約の時代、神殿での礼拝は祭司だけに許されました。しかし、ここで礼拝している者は、キリスト者すべてです(Iペトロ二章五節)。キリスト者は信仰において神の前に義と認められ一人ひとり神との直接的な関係に生きる者とされます(万人祭司)。そしてヨハネは、礼拝しているキリスト者たちを数えるように命令されます。この神殿は聖地エルサレムの神殿ではなく、霊的なエルサレムにある霊的な神殿です。

しかし、今なお帰属にこだわっていますユダヤ人は、神殿の外の庭に過ぎない場で、「選びの民」ではなく「異邦人」となっています。神殿の外の庭にいる人々は現在の教会においても存在しています。教会は日々、サタンによる迫害を受けますが、そういった人々が教会の中に潜み込んでいます(参照・ルカ二二章二四節)。その期間は四二ヶ月であり、一二六〇日です。つまり三年半です(参照・ダニエル七章二五、一二章七節)。七年の半分であり、完全な時・永遠の時ではなく、その時は不完全な限られた期間です。同時に、主はその期間に二人の証人を遣わしてください(参照・申命記一九章一五節)。彼らは粗布をまとっています。異邦人に対する悔い改めの招き、神に対する反逆の故の悲しみを表すためです。また、二人の証人とは、二本のオリブの木、二つの燭台であると語ります(四節)。燭台は、教会を象徴する言葉です(一章二〇節)。またオリブは、ゼカリヤ四章一一―一四節で語るように、燭台に油を送る働きがあり、これらは、人間的な権力や能力によるのではなく、聖霊の力によることを意味します。

五〇六節には、エリヤ(列王上一七章一節)やモーセ(出エジプト七章二〇―二二節)を思い起こさせる力が彼らに与えられたことが示されています。神は神の民に對して必要な力をお与えくださいます。二人の証人のように特別な力が与えられる者もありませんが、すべてのキリスト者が、神から必要な力・賜物が与えられます。それは信仰の戦いの中にある時にこそ必要です。

しかし終末を迎える時、二人の証人が殺される時が来ます。終末的な艱難の時代、ソドムやエジプト、つまりサタンの力が強くなるからです。二人の証人の死は、人類に反省をもたらし、つらくなり、神への畏れを呼び起こさなくなります。反対に彼らは喜び踊ります(一〇節)。この彼らの喜びの期間は三日半です。終末の苦しみにあるキリスト者にとつては長い期間かも知れませんが、三年半に比べて短い期間です。

神殿の外の庭にいる者たちが、預言者を殺し、喜び踊ることによって、罪が明らかになります。そしてこれらの罪の故に、彼らは、最後の審判において、神の裁きに遭います。ソドムやエジプトのように、力を誇っていた人々も、すべて罪の故に裁かれます。

この時、神は二人の預言者に命の息を入れてくださいます。ちょうどアダムが創造された時、塵からつくられ、命の息が入られたようにです(創世二章七節)。キリストの贖いの御業と罪の絶滅を受けて与えられる命の息は、もう死を伴わない永遠に与えられる生命となります。

神の恵みは、キリストの十字架を信じる者すべてを数え、そして永遠の生命をお与えくださいます。私たちが神の恵みにあり、また多くの人々がこの神の恵み・愛に接することができまよう、求めていきたいものです。



私たちは信仰生活を送っていますと、その到着点は神によって救われることであるかと思ってしまう。しかし救われることだけに焦点を合わせると、「既に救いの中にあるのだけれど、いっこうに自分の生活は成長しない。神の救いとは何なんだろう？」と考え込むことになります。これは信仰の中心が自分自身となっているからです。救いに与るのは私たち自身ですが、その行為を行うのは、神であり、神の救いの行為の中に、私たちは神の恵みに一方的に与るものとされています。

出エジプト記一五章では、イスラエルの民がエジプトを脱出したことを、主に感謝する歌が歌われています。出エジプトは、まさに「選びの民」とされてきたイスラエルが、現実のみを見つめ、神の選びの目的を見失っていた時に神から与えられた恵みです。

私たちもまた、イスラエルの民のようになっていないでしょうか？ 私たちは、すでに御子の十字架の御業により罪が赦されました。そして永遠の生命が約束されています。ここにはただ「救われる」という概念的なものではなく、神の国における祝福があります。神のご計画とそれに伴う御業があり、私たちはその神の御業に組み込まれ、神の国に招かれています。

ところで一五節で第七のラッパが吹かれ、終末が来ます。世間の終末に関するイメージに「破滅」があります。しかし終末は滅び・恐怖の時ではなく、栄光に包まれた主の御支配が始まる時です。それまでサタンへの支配が神によって許容されてきましたが、サタンは滅ぼされます。すべてがメシアの権威の下にあることが宣言され、サタンと共に罪に汚れた者たちも裁かれます。

そして主の御支配は世々限りなく続きます。また終末のイメージとして、「終わり」があります。現実はそのようではなく、永遠に続く神の国があります。最初に「『救われた』

という概念的なことで満足してはならない」と語りましたが、まさに神を信じるとは、本来、日々侵しています罪の故に裁かれ、永遠に滅ぼされる存在であった私たちが、十字架に架かられたイエス・キリストにより救われ、永遠に続く神の国に入ることが許されることです。人間として、一生涯を終え墓に入りますが、魂は生き続け、最後の審判の時、新しい体が与えられ、神の国に住む者とされます。ここに希望があるからこそ、日頃の生活において、様々な信仰の戦い・肉的な戦い・苦痛・苦悩・災難・艱難・突然の死を遂げたとしても、乗り越えることができ、希望と喜びを持ち続けることができます。

このことが天国における讚美を伴う礼拝へとつながります（一七節）。天国における礼拝は、喜びと感謝から来ます。礼拝において主の御栄光が讃えられ続けます。サタンは滅ぼされ、主の永遠の支配は、神の聖・義・真実がそこに集うすべての者たちに満たされ、罪も咎もなにもありません。

私たちが、主の御前であって今礼拝を献げるのは、まさにこのメシアである主の御支配の時が来た時に、私たちが与る礼拝の前味です。私たち自身は、神の民とされましたが、なおも罪人であり、この世の教会もまた、罪が混入しています。しかし天国では、神の御支配の下、罪は既に裁かれ存在しません。そうした場所に、神を信じる者は招かれています。

こうした主の豊かなる神の国の祝福が私たちに今示されています。私たちに、既に天にある神の神殿（神の国）は、開かれています。私たちは終末の時代に生きる者として、様々な苦難・信仰の戦いの中にあつたとしても、神がお与えくださる神の国を見据えた信仰生活を続けることにより、どのような苦難・困難があっても、戦い続けていくことが可能です。

昨日、長谷部純一牧師が天に召されました。私が大学時代に青森にいた時にお世話になった先生です。私は先生が発病されたことを聞き、九月五日にお見舞いに伺ったのが最後となりました。その時先生は「私の生命については主に委ねており、いつ召されても構いません。しかし五歳になる娘のために、一日でも長生きをしたい」と語っておられました。死に対する恐怖もあつたでしょう。しかし、神によつて与えられた信仰の故に、神の国をしつかり見据えられておられたと私は先生の信仰告白を聞きました。キリスト者としての慰めは、肉体の死を迎えても、神の国に迎え入れられる約束と希望が与えられていることです。

今日は「女と竜」という説教題で御言葉から聞きます。教会らしくない説教題ですが、ここには神の国を見据える生活の喜びが語られています。

一節の女の姿は、創世記三七章九節に出てくるヨセフの夢に似ています。ヨセフは、家族をも支配するものとして夢が与えられました。女もまた、神の支配と栄光を帯びている者として、キリストの教会のことが語られています。古代の時代から、民族や都市がしばしば女性の姿として語られてきました。旧約聖書でも「シオンの娘」と言えば、エルサレムの町やその住民のことが意味します。またエフェソ書五章に、夫と妻を、キリストと教会として語られています。女は、天地創造から最後の審判にいたる地上の教会です。そして教会は子たるキリストの産みの苦しみを味わいます。サタンが世の支配を続けるための反撃があるからです（詩編二章一〜二節）。

これらの力をヨハネは竜の姿で描きます（三〜四節）。この竜は、蛇・悪魔・サタンとも呼ばれます（九節）。また火・赤いで示され、殺人を企てています。七つの頭と十本の角はアンバランスな関係ですが、それぞれの頭は必ず冠をかぶっています。地上のすべて

を治め、世的な力を誇示しています。

サタンは、地上の王たちを支配し、私たちをも支配しています。サタンは、自分たちの力を誇示するために、すべてを破壊し、社会を混乱させようとします。私たちの信仰生活にも、サタンの誘惑は激しくあります。そして、サタンの力に支配された結果、罪の刑罰としての死があります。これが人々を恐怖とします。地上の生活がすべてであり、神の支配がないかのように思わせるからです。

だからこそ、子（メシア）が産まれようとした時、竜は子を食べてしまおうとします。この世の力を誇示し続けようとするためです。

しかし、子は誕生し、すべての支配者となられます（四節、参照・詩編二章六〜九節）。土の器を鉄の杖で粉々にうち砕くように、子は罪ですべてを支配しようとするサタンをうち砕きます。黙示録では語りませんが、これはキリストの死からの復活です。キリストは罪の支配に打ち勝ちました。

従って私たちにとつて、もう死の恐怖は取り去られました。キリストの再臨により、神の国が到来します。その時まで時間がありません（一二六〇日〓三年半〓七年（永遠の時）の半分↓ある定まった期間）が、その間、主の守りがあります（六節）。出エジプトの時与えられたマナや主イエスの荒れ野の四〇日のようにです。主により教会は守られ、またそこに集うキリスト者も守られます。既にキリストは勝利を治めてくださいました。肉体の死を迎えても神の国の希望があります。死に対する恐怖は、それで人生が終わりだと思うからです。しかし、私たちには、神の国の永遠の生命が約束されています。肉体の死を迎えた神の民は、すでに神の御許にあります。だからこそ、神の国の希望を持って歩み続けていきましよう。

私たちは日頃、悪魔の存在をほとんど考えることなく生活しています。しかし今日与えられた御言葉は、犯罪や私たちの行動・発言に、悪魔の力が働き、神を信じようとしている者たちに戦いを挑んでいることを語ります。

前回は二章一〜六節を学びました。ここでは女として書かれているキリストの教会（旧約の時代はイスラエル民族となる）に対して、竜である悪魔が立ち上がり、攻撃を仕掛けていました。この時の悪魔の行動が、何の権威に従っていたかは、ヨブ記一章に語られている通りです。悪魔は天において神の許可を得て、ヨブに対して危害を加えていました。つまり悪魔は、あくまで神の支配の中でしか、行動を起こすことができません。

しかし悪魔は、地上のすべてを支配したいと願っています。従って、神の民の集う教会に対して激しい攻撃をしてきます。特に女の子、つまり教会の救い主とお生まれになられたキリストに対して戦いを挑みます。主イエスは、ヘロデ王の殺害計画（マタイ二章）や、荒れ野における四〇日の断食（マタイ四章）などで、悪魔の攻撃に絶えずさらされていきます。そして、最もサタンの攻撃が激しかったのは、主イエスが十字架に架かられた時です。無実のキリストをユダヤ人は十字架に架けました。一見、サタンの勝利のように思えます。しかし、神の御子、私たちの救い主としてこの世にお生まれになられた方は、十字架の死から三日目の朝、復活なされ、死に打ち勝たれました。罪の力、しいてはサタンに打ち勝たれたのです（一二章四〜五節）。

キリストの十字架から復活・昇天にいたる御業と相前後して、悪魔は天で神との戦いをを行います（七節）。すべてを支配しようとした竜である悪魔の戦いはここで終了します。イエス・キリストの死からの復活、罪に対する勝利がもたらされた時、天上においてサタンは敗北し、滅びます。そのことの故に、天での大きな讚美となります（一〇節）。もう

神は天上において勝利を治められました。そして神を信じる者たちの勝利が到来します。しかし、この世では未だに罪は滅びていません（九節）。悪魔の総司令官は滅びましたが、なおも地上に残存兵が残っているからです。彼らもいずれば滅びます（一二節）。しかし彼らが、人々を誘惑し社会秩序を無くし、犯罪を蔓延させ、神を信じる者たちに対する様々な混乱をもたらそうとします。そして、神の子とされたキリスト者も、この罪の残滓があり、地上において聖化の完成を見ることはありません（ウエストミンスター大教理問七八）。

新約の教会は、サタンの攻撃において、迫害を受ける存在とされています（一三節）。信仰を保つていく上で、家族・地域の人々・社会との間に、戦いが生じているのは、新約の教会にとつて避けることはできません。

しかし一二章一四節は、私たちにとつて慰めです。逃れの場所である荒れ野に行くためのすべての必要が備えられます。私たちが信仰を失い、神の国を見失わないように、神は守ってくださいます。またこの戦いの時は、神の国に比べれば（七年Ⅱ永遠）、ある限られた期間（三年半）です。既にこの戦いは二〇〇〇年間続き、この後何年続くか分かりません。しかし神の国の時間からすれば、一時的です。

サタンはすべてを飲み尽くすように、教会を迫害します（一五〜一六節）。しかし出エジプトのイスラエルが紅海で海を渡った後、エジプト軍が阻まれたように、私たちの進路を、主は守ってくださいます。信仰の武器を身につけていればよいのです（エフェソ六章一〇〜一八節）。

私たちは今から主の晩餐に与ります。このことで私たちは、神がすでに悪魔に勝利され、私たちを罪からの救いをもたらしてくださったことを確認することが許されています。さらに、キリストの再臨の時、地上のサタンも滅ぼされ、私たちに天上の祝福が与えられることを確認したい。「メシアの権威」は、教会を通して、既に地上にもたらされています。私たちを罪から守り、神の国をお与えくださる神に感謝したい。

東京大聖書展が始まりました。今回、死海文書が初めて日本で展示されました。これは約二〇〇〇年前の旧約聖書の一部です。これは一九四六年に死海沿岸のクムラン洞窟にて発見された文書で、それ以前はAD一〇〇〇年前後の旧約聖書写本しか見つかっていなかったことからしても、驚くべき発見です。神の御言葉である聖書はその間、書き写され、保存されてきました。それはそれぞれの時代に生きたキリスト者の信仰の表れです。

一二章では、キリストの十字架の死と復活により、竜として描かれています。サタンが、天における戦いに敗れたことが記されています。そして一八節で竜は海辺の砂の上に立ちます。それと同様に一匹の獣が海の中から上ってきます。「竜はこの獣に、自分の力と王座と大きな権威とを与えた」ことより、サタンが政治的に罪を犯す権力を国家に対して与えます(二b節)。

そもそも国家的な権威は、神が国家的為政者に対してお与えになった権威です(ウエストミンスター信仰告白二三章一節、ローマ一三章一〜四節、Iペトロ一章一三〜一四節)。

従って、ここでサタンが国家的為政者に対して権威を与えることは、神の支配に対して対抗する力としてです。サタンは、地上での支配を行おうとして、国家を利用します。それが神の御国形成をする教会との間で、戦いが生じます。国家のすべてがサタンの支配下にあるわけではありませんが、キリスト者は、常に国家に対して、注意を払う必要が求められています。

この獣には神を冒瀆するさまざまの名が記されており(一節)、死んだと思われても、致命的な傷も治ってしまうこと(三節)より、歴史の中に繰り返される教会を迫害する国家の姿です(参照・ダニエル七章四〜七節)。

歴史的には、巨大で強力な国家であっても滅びて行きました。イザヤ三三章に記されていますのはアッシリアは、バビロンに滅ぼされました。黙示録の時代の世界の覇者ローマ帝国もまた滅びました。今世紀に目を向けると、ナチス・ドイツのヒトラーや第二次大戦中の日本軍も教会を迫害しました。

そして人々は権力に対して頭を下げます。その方が楽だからです。権力を持ち、すべてを支配した者に従順になることで、自分の身を守ろうとします。戦時中の日本の教会は、こうした罪の姿をさらけ出しました(四節)。

しかし、神の民とされ神の国が約束されたキリスト者は、サタンに対して戦うことが求められています。ローマ皇帝を崇拜するよう求められた聖書の時代のキリスト者たちは、それを拒み戦いました。迫害されようとも、信仰を貫き、神として崇められています。皇帝に対して頭を下げることはしませんでした。死海文書は、そのような信仰者が洞窟に文書を隠したのと言われています。ヒトラーに対して、ボンヘファーなどは戦いました。

日本の神社参拝強制に対して、韓国・朝鮮のキリスト者は、それを拒否し戦いました。それは、すべてを支配しているのは主なる神だからです。獣がすべてを支配しているようであっても、彼らの支配は一時的であり、神からの許可がなければできません(五〜七節)。彼らが支配することが許されているのは僅か四ヶ月(一二六〇日、三年半)です。神の支配(七年||永遠)に比べれば一時的です。その間、彼らは支配し、教会への迫害も続きます。

激しい迫害の最中は、信仰を貫くために生命の危険すら伴います。キリストの救いを告白していても、自分中心的な生活をしていけば、肉体の死にさらされた時、戦うことはできません。しかし、主が私たちにお与えくださった信仰は、キリストの十字架による罪の

赦しと同時に、神の国における永遠の生命が伴います。ここにキリスト者の忍耐と信仰が必要で（九〇一〇節）。信仰の希望を確信して歩み続けたいものです（イザヤ三三章五〇六節）。

「完全には足りない者」

列王記下一章二〇一四節、ヨハネの黙示録一三章一一〇一八節

二〇〇〇年一月一二日

日本の政治は、明日にも内閣が代わろうかという局面です。傍目に面白いですが、日本の最高権力者についての事柄であり、私たちも真剣に考えなくてはなりません。現在の日本の権力争いは、主に経済的な背景がありますが、権力者が国を平穩に治めるために宗教を利用することを常としています。

一三章前半では、一匹の獣が政治的に世界を支配しようとするサタンの虜になっていきます。サタンは天における戦いに敗れましたが世界を征服しようとしています。従ってそれを阻んでいきます神と神の民に、地上で戦いを挑んでいきます。この時キリスト者は、信仰を守るために殉教の死さえ覚悟する忍耐と信仰が必要です。そして、一三章後半はもう一匹の獣が登場します。この獣は、見た目には最初の獣の様（一〇二節）な恐ろしい存在ではありません（一一節）。この獣は小羊に似ています（一一節）。小羊は神に例えられるように、従順で、この獣は人目には優しさを感じさせます。しかしこの獣は、竜（サタン）の如く巧みに人を騙し、致命的な傷が治った第一の獣を無理に拝ませようとします。つまり第一の獣が政治的な権力者であり、第二の獣は、権力者を神に崇め立てる偽預言者です。

偶像は、サタンの影響を受けた国家と巧みに結び付きます。戦前の日本がそうです。戦争が激しくなる中、宗教団体が発布されました。国が宗教を配下に置きます。そしてキ

リスト教を、神道・仏教に肩を並べる宗教と認める代わりに、「神社は宗教ではない」と神社参拝を迫り、天皇崇拜を強要しました。サタンの虜である国家は、宗教を配下に置き、さらに自分の権威を高めるため偶像を拝ませます。そのために偽預言者が立てられます。

アハズヤ王（列王下一章）は、最初病気のためにエクロンの神により頼もうとしますが、そこにエリヤに出会います。その時アハズヤ王は、五〇人隊長をエリヤのもとに遣わします（九、一一節）。アハズヤ王は、エリヤが神から遣わされた預言者であることを知りつつ、自分に従う様命令し、神を自分の配下に置こうとしました。

偽預言者は、見せかけの優しさと共に、しるしや不思議な業によって、人々を惑わして信じさせ（一三〇一四節、マルコ一三章二一〇二二節）、偶像を作らせることにより、第一の獣である権力者を拝ませようとします。

さらに第二の獣は、自分たちに従わない者に対して、戦いを挑みます（一五〇一七節）。ここにあるのは、信仰ではなく強制であり、形を求めます。偶像による支配とは、まったく心・魂の中身がない、形を要求します。戦前の日本の場合、この刻印を、神社参拝と国民儀礼を行うことによって求めました。キリシタン時代の踏み絵も同じです。獣の像を拝まなければ、村八分にされ、捕まり、処刑にさせられていきます。こうして、サタンは自分の力を地上に見せつけます。こうしつづ、獣は人々の右手か額に刻印を押させていきます。これは神の僕に刻印が押されていくことに（七章三節、一四章一節）対抗することです。どちらか一方のみを選び取る必要があります。獣を拝まないことによって、神の民は地上で苦しみを受けます。しかし主に従う者たちは、神によって贖われます（一四章四〇五節）。一方、獣によって刻印が押される者は、地上で身が守られても、神の贖いはありません（一四章九〇一一節）。

この偽預言者は「六六六」です（一八節）。この解釈は難解です。様々な解釈がなされてきました。説教題を「完全には足りない者」としました。まさしく神の完全をあらわす「七」に対して、「一」足りない「六」が並んでいます。数字「六六六」は不完全であり、

一四章九〇一節のように、最後には主の裁きに遭う者としての意味が込められています。第二の獣である偽預言者は、偶像を用いて、第一の獣（権力者）を拝ませようとしています。あくまで形だけであり、ここに魂はありません。しかし神を信じるキリスト者は、生活のすべてがキリストと関わります。生活・行動・発言のすべてが、キリストを証しする者として、御言葉に従った歩みとなります。そして地上における豊かな神との交わりにおける生活が、神の国につながります。

私たちは、政治に対して、右往左往する必要はありません。しかし、立てられた権力者が、偽預言者を用いて、自らを拝ませようとする時、信仰の戦いが求められます。そのために、日々、政治に対しても、目を光らせていく必要があります。復活のキリストによつて罪が贖われた者として、魂を支配し得ない偶像を、恐れずに、信仰生活を送っていきたいものです。

### 「小羊の名が記された者」

#### 出エジプト記二三章一四〇一九節、ヨハネの黙示録一四章一〇五節

二〇〇〇年一月二六日

一三章では二匹の獣が、それぞれ地上の権威者、偽預言者として働く様子が語られています。そうした中、キリスト者は、忍耐と信仰の戦いが強いられます（一三章一〇節）。ある意味では、権力者に従い、偶像に頭を下げる方が、楽しく楽に生きることができるとかと思いません。しかしキリスト者は、苦難と忍耐の信仰生活を送ることが求められます。それは何故か？キリスト者は、目先の利益を求めるのではなく、すべてを治める方を信じ、天国を見据えているからです。そして罪の赦しも与えられ、神からの祝福も与えられ

ています。

一四章に入り、ヨハネは天国での祝福の姿を見ます。シオン（一四章一節）は、神の国の完成の意味合いが込められており、天的エルサレムにある永遠の祝福の世界が表されています。そこに小羊の名と小羊の父の名が記された者たちがいます。これはすべてのキリスト者です。一三章一六節には地上の偶像を拝した者には、獣の名が記されていることが語られています。私たち人間は、このどちらを選ぶかが求められています。そして神の名が記された者のみがシオンに行くことができます。

キリスト者は、既に罪が贖われています（三節）。そのためにキリストは地上に宿られ、十字架の死を遂げられました。このことにより、すべてのキリスト者のすべての罪が償われました。キリスト者とされた者は、神に買い取られ、神の僕、神の奴隷とされました。神の僕であるからこそ、主の栄光を讃え、讃美することが許され、また同時に神の祝福がの特権が与えられました。

そして、こうした特権が与えられたキリスト者に求められる生活について、ここで示されます（四〇五節）。「童貞」であることは、結婚を否定した言葉ではなく、宗教的清さの求めです（参照・IIコリント一章一二節）。十戒の第一・第二戒の教えの要請です。また、神によつて神の国に導かれるキリスト者は、神の国に行く道を小羊であるキリストに聞くべきです（参照・ヨハネ一〇章四節、一四章六〇七節）。第三に、キリスト者は、神と小羊の初穂です。出エジプト二三章では、初穂・初子を献げることが求められています。神から与えられた最も素晴らしいものを主に献げます。キリスト者は、神にとつて最も愛されている者であり、二番煎じ・三番煎じではありません。だからこそ、私たちは神に最も愛されている者として、神の御言葉である聖書に従うものとされています。それが神の聖・義・真実に倣う者として、「その口には偽りがなく、とがめられるところのない者たち」（五節）となることです。

こうした神に最も愛され、キリストの贖いに与っていますクリスチャンは、神の御国シ

オンに招かれ、神を祝福し、讚美の歌を歌う恵みが約束されています（二〇三節、一九章一〇八節）。

神がお与えくださる神の国に感謝を持って、主の御言葉に従い続けていきたいものです。

「神を畏れる！」 出エジプト記二〇章一〇一節、ヨハネの黙示録一四章六〇一三節

二〇〇一年一月七日

ここに天使が登場し、地上に住む人々、あらゆる国民、種族、言葉の違う民、民族に告げ知らせようとしています。マタイ福音書は最後の箇所で大宣教命令を記しています（マタイ二八章一六〇二〇節）。この宣教命令で、全世界のすべての人たちに對して、神の真理を伝えるように命令されました。これは、裏返しに語れば、地上に住むすべての人々に告げられた宣教に對し、耳を貸さない者に對する警告の言葉でもあります。宣教とは、福音の提示、永遠の福音です。キリスト者の中には、律法と福音を切り離して考える人もいます。しかし、律法もまた福音です。そして、ここで語られる福音とは、主に従おうとしない者たちに對しての裁きの警告です。諸刃の劍です。そして福音は、神の永遠のご計画の内にあり、永遠に変わることがありません。天使は、すべての人々が聞こえる大きな声で語ります。

第一の天使が語ります。一四章七節はウエストミンスター小教理問一を思わせます。私たちが神を信じるのは「救いのためである」と語られますが、源を理解しておかなければ、何ための救いであるかわからなくなります。結果的に私たちが信仰を持つことは、私たちの罪が赦され救われるためですが、遡れば、それは神と私たちとの本来の関係を回復することです。被造物である私たちが、創造者である神の栄光を称え、礼拝し続けることです。

第二の天使が語ります（八節）。バビロンは、南ユダの民が補囚の民（BC五九七年）とされた大国であり、このバビロンも滅び（BC五三八年）、ユダの民は補囚から解放されました。イザヤ書一三章はバビロンの滅びの預言です。ヨハネがここで語るバビロンは、大国ローマです。この国もまた腐敗に満ちた国でした。皇帝崇拜行い、神の怒りを招くかどうかを浴びていました。罪の中にある者が聖餐に与ることは神の怒りを招きます。地上にあり繁栄を遂げた国も廃れます。それは罪の故であり、創造主であられる神に栄光を讃え、礼拝していません。

最後に第三の天使が語ります（一四章九〇一一節）。一三章で地上の人々は、獣の名の刻印か神の刻印を受けていることを語ってきました。地上の生涯で神の刻印を受けたキリスト者は、迫害にも遭い、苦しみにも遭います。しかしここで逆転が起こります。ここで苦しみの中に落とされるのは、まさしく獣の名の刻印を受けた者です。私たちは地上の生涯七〇〇八〇年が、長い時であると思えます。その間、キリスト者として、多くの苦しみ、挫折、くじけそうになることがあります。しかしキリストの再臨の時、主の裁きが行われ、これが逆転します。地上において、人間の本来あるべき姿である神に栄光を帰し、礼拝し続けるキリスト者は、天国に迎えられ、永遠の平安と喜びに満ちつつ、神礼拝を行い続けることが約束されています。だから忍耐が可能になります（一二節）。

「今から後、主に結ばれて死ぬ人は幸いである」（一三節）。この言葉は、既に迫害の中にあるキリスト者に對する勇氣と励ましを与え、慰めに満ちた言葉です。そしてこれは私たちに与えられた言葉です。人は誰しも老い、早かれ遅かれ死を迎えます。この主の言葉は、私たちを恐怖から解放し、安らぎを与えます。人はいつか死にます。しかし信仰者の死は、この世の労苦から解放され、安らぎを得て天国へ到達します。だからこそ、キリスト者は、悲しみの中にも希望があります。

私たちは、すでにキリストの十字架の御業により、神と私たちとの断絶はとかれ、被造物としての本来あるべき姿が示されています。そして、天国において主に結ばれ、安らぎ

を得ることが宣言されています。だからこそ、地上の生涯にあつて、本来あるべき姿として、主を畏れ、神の栄光を讃えつつ、何事をなすにしても主を証しし、礼拝し続けていくのです。

## 「刈り入れの時」

ヨエル書四章一〜一五節、ヨハネの黙示録一四章一四〜二〇節

二〇〇一年一月一四日

今日与えられたテキストだけを見れば、最後の審判の恐ろしさのみが伝わってきます。しかし聖書を読む時には、前後関係、黙示録全体、そして聖書全体を見渡して読む必要があります。そのことから目を離すと、今日のテキストからは「神はすべてを裁かれる、恐ろしい方である」と言った誤解が生じます。

今日のテキストも直前の一三節と切り離して読んではいけません。神は強く語っておられます。つまり、主に結ばれている者は、この後語られていく裁きの時、すでにその場からは離され、地上における労苦からは解かれ、天国の安らぎの場に入れられています。これは地上の生涯においてキリスト者が、信仰を貫くことにより様々な苦しみ・戦いが強いられますが、最後の審判の時に、逆転が起こることを語っています。

一四節以降で、神に繋がっていない者に対する裁きが語られています。人の子のような方こそが、キリストであり、天上において再臨される日を待っている様子が語られています（一四節）。一五節において、天使がキリストに命令しているように思える言葉は、父なる神の発せられる言葉を天使が取り次いでいます。父・子・聖霊の三位一体の関係、そして神と被造物である天使・人間との関係が逆転してはなりません。

ここでは最後の審判の様子を、刈り入れとして語っています。主イエスは、毒麦のたとえを語っておられました（マタイ一三章二四〜三〇節、三六〜四三節）。最後の審判は、主イエスの話しが成就することとして、ヨハネは語ります。

ヨハネは続けて最後の審判について語ります（一四章一七〜二〇節）。この裁きは、全世界に行き渡ります。最後の二六〇〇スタディオオン（一スタディオオン＝一八五m）は、約二九六kmの長さです。この数字に関して、様々な説があります。特に有力なものとして、ヨルダン川の長さが約三〇〇kmであり、その距離が示されており、裁きがイスラエル全土に行き渡るといふものです。しかし黙示録を読む時、いくつもの数字が象徴的に表されています。七、一二、一四四〇〇〇、六六六などです。これも象徴的に考えることができます。一六〇〇は、四×四×一〇×一〇となり、四とは、聖書において四方を示し、地の広がり、地の全体を示す数字として語られています。すると一六〇〇は、四×四でありそれが一〇×一〇（完全数）で掛けられていますことから、全世界の隅々まで、裁きによつて流される血が広がっていくことを語っていることとなります。

しかしその裁きの搾り桶は、都の外で踏まれたと語られている通り、都エルサレムの外で行われます。主の裁きは都エルサレムには及びません。最初に旧約聖書ヨエル書四章をお読みしましたが、ここには主の裁きがなされる理由、つまりイスラエルの罪が示され、裁きが語られています。しかし一六節以降において、ユダの救いが語られています。全世界が裁かれます。しかし都エルサレム、聖なる山シオンには、その裁きは及びません。逃れ場です。ここに、一三節で語られていた安らぎの場、平安の場があります。

私たちは、自分の力で、この救いの場を目指しても、そこに到達しません。私たちもまた、本来ならば、鋭い鎌によつて刈り入れられ、裁きにあう存在であつたからです。しかし主は、私たち一人ひとりをつれてくださり、罪の赦しと救い、永遠の安らぎをお与えくださいました。キリストの遜りの誕生と生涯、そして十字架は、まさに私たちの救いをもたらされるためでした。罪の裁きが全世界に行き渡る中、神の恵みに与るものとされてい



ることに、心から感謝して、歩んでいきたい。

## 「勝利の歌」

イザヤ書六六章二二～二四節、ヨハネの黙示録一五章一～八節

二〇〇一年二月四日

ヨハネは三つ目のしるしを語ります（二節）。第一は神の教会である「ひとりの女」（一二章一節）、第二はサタンである「大きな赤い竜」（一二章三節）でした。そして第三のしるしは最後の審判（五～八節）を視野に入れつつ神の国を見ます。最後の審判により神の怒りは極みに達し、これ以後、神の裁きはありませぬ。そして神の国が到来します。そこには神の正義が充満し、罪はありません。

二～四節は、ヨハネが見た天国の光景です。黙示録は「預言」であり、「予言」ではありません。予言は前もって予想する事柄ですが、預言は神がヨハネに対して前もって未来の事・この世の終わりに起こることを見せ、語らせています。これは黙示であり臆気です。ヨハネは天国の素晴らしさを語ります（二節、参照・四章六節）。神の栄光の輝きを表す象徴的な表現と言えます。獣・像をキリストへの信仰の故に拝まない者は、地上では皆殺されました（一三章一五節）。しかし彼らが天国に集っています。

ヨハネが見ています天国には、獣・像・その数字として示されています偶像崇拜者、地上において神に従わずに権力を振りかざしています者たちは、存在しません。すでに最後の審判において、神の怒りの内に滅ぼされました。

地上での歩みは、私たちにとつて果てしなく長い年月ですが、神の歴史、永遠の時間に比べれば、ほんの一瞬です。地上の歩みの中、様々な信仰の戦いが私たちは強いられます。しかし、神による罪の赦しと救いを信じる者は、永遠の時、天国における神の祝福に入れ

られます。

そして天国に入る者たちは、喜びの歌を豎琴の音に併せて歌います。礼拝の中でも讃美歌を歌いますが、讃美は私たち自身の満足のために歌われるものではありません。神によつて永遠の生命が与えられた者として、神の栄光を称えるために、神の勝利を讃えます。

そして天国での讃美は、モーセの歌と小羊の歌です（三～四節）。イスラエルの民は、エジプトからの救出の喜びを出エジプト記一五章で歌います。また小羊であるキリストによつてサタンから救い出され、神の正しい裁きを下していただいたことへの讃美の歌です。ここでモーセの歌は、小羊の歌の予表として関連付けています。モーセと小羊（十字架に架けられたイエス）を対象させることにおいて、モーセを旧約の勝利者の代表、小羊を新約におけるキリストの十字架と復活による勝利を語ります。旧約聖書と新約聖書は、常に一貫しており、断絶・対立と受け取ってはなりません。だからこそモーセの歌と小羊の歌が、一つの歌として歌われます。

主なる神は全能者であられます。全能者とは、すべてのことを成し遂げることができ方です。万物を創られ、歴史を治め、そして罪の故の死に行く者を救い、永遠の生命をお与えくださるごとのできる唯一の方です。

神を信じない人の中には「なぜ神はすべての人を救わないのか？」、「神はなぜ苦しみを与えになるのか？」と言った疑問を語ります。しかし天国において歌われるように、神の道は正しく、また真実です。神を信じる者は、救われます。裁きに遭い、滅ぼされる者は、自らの罪の故に裁かれます。私たちは地上の生涯において様々な苦しみに遭います。しかし、神は私たちの祈りを聞き入れて、必要を満たしてください。そしてキリストの十字架と復活の故に、永遠の死に代わる永遠の生命をお与えくださいます。人間の本来の生きる目的は、神の栄光を称え、神を讃美することにあり、神は私たちにそれをお与えくださいました。神が私たちを救いに導いてくださったからこそ、私たちは神を讃える礼拝・讃美へと導かれています。これが私たちの何よりの喜びです。

天国に集う者は、神によって予め集められた神の民です。最後の審判によって、罪による死にあたる者はすべて滅び、キリストの十字架により罪の赦しを受けた者のみが、天国における讚美に加わります。私たちは聖餐式に与りませんが、キリストの十字架の体と血を想起すると同時に、天国における食卓をも思い描きつつ与ります。まだ、信仰告白を受けたい人たちも、自らの口で信仰を告白し、この聖餐に・天国の食卓に与る時が来ることを願います。神の全能なる御支配と救いの御業に心から感謝したい。

## 「神の怒り」 エレミヤ書一〇章二三〜二五節、ヨハネの黙示録一六章一〜一一節

二〇〇一年二月一日

説教題は「神の怒り」ですが、ここに終末における最後の審判の様子が語られています。黙示録には、神の裁きの様子が繰り返されていますが、一六章は八章と酷似しています。丁度らせん階段を登っている様です。同じようですが、ゴールに近付いています。聖書のどこを読んでいる時も、私たちは神が準備してくださっているゴールを見据えて読まなければなりません。ゴールとは、私たちの罪の赦しが与えられ、永遠の神の国に入る時です。そこに到達する時、私たちは、本来のあるべき姿を取り戻します。

ここでの八章との大きな違いは、神の怒りが、全世界・全宇宙に及ぶことです。八章では、大地・海・星・人類の三分の一が滅ぼされるに過ぎませんが、ここでは例外はありません。つまり、これが本当の最後の裁きです。

しかしすべてが裁かれるのでしょうか？ 裁きの対象者は、獣の刻印が押されている人間です（二節）。神の刻印が押されている者は除外されます（九章四節）。丁度出エジプトにあつて、門に血を塗ったイスラエルには、主の裁きが及ばなかったように、神の刻印

が押されている者には、神の怒りが及びません。

海の水が血に代わり、太陽が人々を焼き尽くすため、誰も生きていくことはできません。肉体の死を迎えます。ここでの神の怒りによる裁きは、永遠の裁きです。

神を信じていない人々は、「神が救う者と滅びる者とを分けられるのは不公平である」と語ります。しかし神の裁きは正しいのです（五〜七節）。神は創造者であり、人間は神の被造物に過ぎません。被造物の人間に、創造者をすべてを理解することはできません。しかし神は、人間の罪の故に裁きます。神の義しさは、私たちの行動・発言・そして心にまで及びます。神の義しさの前に、誰一人、罪が見いだされません。その意味では、すべての者が神の裁きの故の死に価します。従って、神の恵みの手が差しのばされなければ、誰一人、神の裁きから逃れることはできません。

しかし、神の愛により、私たちキリスト者は、神の裁きから逃れ、罪が無かった者とされれます。そのために独り子イエス・キリストの地上での生涯と十字架の死と復活を成し遂げられました。神は不公平ではなく、罪の故に滅び行く者でありつつも、自らの罪を悔い改め、神への信仰を表す者に、救いをお与えくださる憐れみ深い方です。

つまり、神の裁きの前に置かれながら、神の御意志が示されながらも、神に背き続ける者に対する裁きが、ここで語られています。黙示録において、神の裁きが、段階的になされるのは、神は、人が自らの罪を悔い改め、神を信じる者をされることを待ってください。愛しているからです。恐ろしい神ではなく、忍耐強く人々の悔い改める時を待ってください。愛なるお方です。

人間は罪の中にあり、神の求めておられる義から離れてしまします。その誤りすら判りません。しかし、主は律法を通して確認する術をお与えくださいました。また、罪の刑罰により懲らしめてくださる事により、天国に通じる道へと引き戻してくださいました。そうした神からの恵みが提示されているにも関わらず、神に背き、神への信仰を表す者に対する迫害・殺害を続ける者に対して、主はお怒りになられ、裁かれます（エレミヤ一〇章

二三（二五節）。

神は、悔い改めの時を待っておられます（九節）。悔い改め、神を信じ、神の栄光を称える者は、この裁きから逃れることができ、神の永遠の祝福に入れられます。しかしそうでない者たちは、神による裁きが示されても、なお神の名を冒瀆し、悔い改めなかった故に、裁きに遭います。

地上において信仰の故に死を遂げ、殉教することがあったとしても、信じる者にはゴールとしての天国が約束されています。地上の生涯における一時の欲望を満たすためではなく、永遠の天国を求め歩み続けていくことが求められています。そして神を信じる者に、最後の裁きから逃れ、さらに天国における永遠の生命が与えられていることに感謝しましょう。

### 「ハルマゲドン」 出エジプト記八章一〜一五節、ヨハネの黙示録一六章一二〜一六節

二〇〇一年二月一八日

「ハルマゲドン」という言葉は、聖書から離れオウム真理教の専売特許のような言葉となっています。「最終戦争」を意味させ、人々に恐怖を与えました。その延長線上に松本・地下鉄サリン事件があります。ここにはいくつも問題があります。①聖句を一つ取り出して、標語の如くに読んでいます。宗教改革で「聖書のみ」「聖書全体」と語られました。聖書全体の方向性（罪からの救い）を見た上で、この黙示録の聖句を考えねばなりません。②教祖・麻原彰晃自身が、神に成り代わろうとしています。偽キリストであり、聖書の語る創造主でありすべてを治めておられる父・子・御霊なる神を否定します。③人々に恐怖を煽り、強制的に人々を服従させようとしています。

しかし「ハルマゲドン」は聖書の言葉（黙示録一六章一六節）です。「ハル」とは「山」を表す言葉であり、「ハルマゲドン」とは「メギドの山（丘）」と字義通りでは訳される言葉です。聖書巻末の地図三にもその地名がありますが、イズレエル平野の中に位置し、カナン人の要塞の町です。ここはエジプトを脱出し、約束の地が与えられたイスラエル人にとって、なかなか攻め落とすことのできなかつた町です。従って神に敵対する勢力が集まる場として、この場所が代表されて語られています。聖書は「汚れた霊どもがこのハルマゲドンに王たちを集めた」と語り、「最終戦争」の意味はありません。

ところで一六章一二節は、九章一四〜一五節と対応します。九章では災害が部分的でしたが、ここではすべての王たちが集まり、すべてを滅ぼそうとしています。そして一六章一三節で竜・獣・偽預言者から三つの悪霊が出てきます。それぞれが竜・サタン（一二章三節）、獣・反キリスト（政治的権力者）（一三章一節）、偽預言者・「もう一匹の獣・偽りの宗教的指導者」（一三章一節）です。これらは一四章六〜一三節の人の子の到来に先立って来る三人の天使に対応します。

そして彼らの口から蛙のような汚れた霊が出てきます。出エジプト記八章でも、一つの災害として蛙が出てきますが、蛙は汚れた動物とされています（レビ一章九〜一二節）。この蛙が口から出てくるのであり、地上の王たちが人々を欺く姿、偽預言者が人々を巧みに騙す姿が描かれています。

確かに最終戦争のようです。しかしここでの聖書の方向性を私たちは見失ってはなりません。このような戦いは、人々を恐怖に陥れ、自分に服従させるためではありません。サタンの力に神が勝利を治められ、神の日が到来することを示すためです。ここに私たちの希望・喜びがあります。

そして最後の審判とキリストの再臨は、突然やってきます（一五節）。黙示録には終末的な出来事が繰り返し語られています。これは未来のことではありません。新約の時代Ⅱ終末の時代であり、私たちの生活が終末的な出来事の中にあります。終末の時代だから

こそ、キリストの再臨の時がいつ来てもおかしくはないのであり、またその備えをしておかなければなりません。

このことはキリストの御言葉からも確認することができます（マルコ一三章三二〜三七節、マタイ二五章の十人のおとめのたとえ）。

「神が突然来ることは、許せない」と語られる人々もいるかも知れません。しかし、今は終末の時代です。そして、神の民としてのキリスト者は、生活のすべてにおいて、神の栄光を称え、讚美します。「ハルマゲドンだ」「最終戦争だ」「明日にも神が来る」と騒ぐから恐れ信じるのではなく、日々神からの救いが与えられた恵みに感謝しつつ、神の栄光を称えつつ、歩み続けなければなりません。

### 「事は成就した」 出エジプト九章一八〜二五節、ヨハネの黙示録一六章一七〜二一節 二〇〇一年二月二五日

「事は成就した」と天使は語ります（一七節）。この言葉は、英語では、*It is done*、と語り、ギリシャ語原文では一語です。「なる、起こる、生じる、現れる（do）」の意味を持つ動詞の完了形です。第七の天使の言葉とそれに伴う地上での出来事により、裁きが終了したことを語ります。天使の言葉により発生する出来事は一八節以降で語られますが、神が創世記の初めに天地万物を創造された宇宙は、その役割を終えます。罪を支配しているサタンは、ここですべてが滅ぼされます。

そもそも、神が天地万物を創造された時、人間は第六日に、三位一体なる神にかたどられ、似せてつくられました（創世記一章二六節）。そして命の息を吹き入れられました（同二章七節）（参照・ハイデルベルク問六）。そして、人間が善悪を知る木の実から食

べなければ、しばらくして神の国が到来してしまいました。しかし人間に罪が混入し、サタンの支配の下に置かれました。神の目的はすぐには完成できなくなりました。義と聖である神は、人を愛されていましたが、罪を持っていて人をそのまま、神の国に導くことはできません。従って、神が人間を救われようとする時、サタンを滅ぼされ、罪を除去する必要がありました。そのために、キリストの御業が必要だったのです。

従って、ここで第七の天使が「すべては成就した」と語った時、神の御業は完了し、人間の救いが成し遂げられたことを意味します。ここでは、残された者たちの裁きの様子のみが語られています。つまり、神の民については語られていません。この時点で、神の国に入れていたと考えられます。

「見よ、わたしは盗人のように来る」（一五節）と語られています。ここで、主がこつそりと来られ、神の民を救いに導かれることが語られています（参照・マルコ一四章三二〜四二節）。だからこそ、第七の天使の言葉が発せられたのは、神の民が天に上げられた後と考えることができます。

ある人々は「神を信じるのは、年を取ってからで構わない」と語ります。しかしそうではいけません。事が成就した後、キリストの再臨後では遅いのです。

事が成就した時、どうなるのか？ 一八節以降で語られています。「大きな地震」は自然現象です。日本列島は地震が多く、誰もがその恐怖を知っています。しかし終末に現れる地震は、比較にならない位大きいのです。この大地震が起こる時、神の民は神の国に移されています。そこは、もう動かされることのない御国です（参照・ヘブライ一三章二五〜二九節）。

一三章一三の大地震では、被害は都の十分の一に過ぎません。しかしここでは、大きな都は三つに裂かれ、完全に崩壊されます。すべてが滅ぼし尽くされると言っても過言ではありません。神は終末の時、この最後の審判に至るまでに、繰り返し忍耐強く、悔い改めと信仰の道を語ってこれられました。今もその時です。しかしそれにも関わらず、悔い改め

なかつた者、神への信仰を持たなかつた者が、残されます。

大地震によつて島は動き、山々も動きます。一タラントン（約三五kg）の大粒の雹が降ります。雹はイスラエルの敵に対する神の怒りが表れる現象です。そして雹が降ることにより、エジプト人が、モーセによつてもたらされた奇跡によつて神を冒流したように、ここでも神を冒流します。神の民でない者たちが滅されるのは、神を冒流した結果です。しかし、これらの審判がくだされるまで、神は、すべての者が悔い改める時を待つておられません。神は、すべてを裁かれる恐ろしい神ではなく、裁きに至るまで、忍耐強く、悔い改めと信仰を告白する人を待つておられる愛の神です。キリストの再臨の後、「事は成就した」と語られた後では遅いのです（参照・詩編四六編）。

## 「大バビロン」 エレミヤ書五章七〜一七節、ヨハネの黙示録一七章一〜六a節

二〇〇一年三月四日

「大バビロン」は、「みだらな女たちや、地上の忌まわしい者たちの母」（五節）であり、この言葉が額に記されている女は、大淫婦です。バビロンとは、古代の世界帝国であり、あらゆる民族を支配していた国です。これは都市が女性名詞で表されているからであり、他の都市もまた淫婦として語られています（ニネベ・ナホル三章四節、テイルス・イザヤ二三章一五〜一八節）。この時代（一世紀末）ではローマを示しています。ローマが大淫婦として語られるのは、神の愛を裏切り、偶像を拝み、サタンに仕えるからです（エレミヤ三章九節）。この女とみだらなことをする者が地上の王（一〜二節）であり、偶像に仕える為政者の姿です。ローマでは、政治が宗教と一体化し皇帝崇拜が強要され、当時のキリスト者は皇帝崇拜を拒否するが故に迫害されました。ヨハネもまたパトモス島に

（一章九節）に流されていました。

この大淫婦は、小羊の妻（二一章九節）と対置されます。私たちは「父なる神」と言いますが、小羊の妻である「母なる教会」の養いが必要です。現在のフェミニストは、「父なる神」が「性差別である」とし「母なる神」とも語りませんが、これは教会の働きを無視した結果です。聖書が語ることは、性差別でなく、天地創造の神の秩序から来る男女の働きの違いからです。

カルヴァンも、教会についてこのように語ります。「キリスト者は、彼らが乳飲み子であり、子供である間に限って、教会の働きと努めとによつて養育されるといっただけでなく、成長した状態に達してもなお、教会から『母』としての配慮のもとに統治され、ついには信仰の究極の目標にまで達するにいたるのです。なぜなら、『神が合わせたもうたものを引き離すのは、よろしくない』（マルコ一〇章九節）からです。すなわち、神御自身が父でありたもうた者たちにとつて、教会は『母』なのです。『我々は、この母の胎内に身籠もられ、この母から生み落とされ、この母の懐で育てられ、ついにこの母の指導監督のもとに見守られて、最後に死すべき肉を脱ぎ捨てて、天使たちのようになるにいたるのでなければ、恒久的な生命に入る道はないのです』。

荒野（三a節）は、この女によつて混乱と無秩序に陥った人間社会です。社会的な秩序は、神の律法に従わなければ崩壊していきます。一国の指導者には多大な権限が与えられています。そこに「自己欲」故に、財産を築こうとし腐敗が生じ、社会は無秩序になります。そして自己肯定するために、宗教が持ち込まれます。歴史はそれを物語っています。またこの女は獣と結び付きます（三b節）。獣はサタンである竜に仕える政治的な権力者です（一三章一節）。反キリストに仕える者として、女である国と、獣である政治的な権力者が結び付きます。そして女は金と宝石と真珠で身を飾ります（四節）。これは権力と富を示し、自己欲と人々を仕えさせるためです。これに対する母なる教会の飾りは、神に向けられる心であり、それに伴う態度です。

人々の額には、刻印が押されています。それは神の刻印（七章三節、九章四節）、獣の刻印（一三章一六節、一四章九節、一七章五節）のどちらかです。神の刻印が押されている者は、それ故に女たちから迫害を受け（六節）、服従が求められます。しかしキリスト者は、御子の遜りと十字架、復活により、罪が赦され、永遠の生命が天国で与えられます。私たちの目指すものは、地上において富を蓄え裕福な生活を行うことではなく、永遠に与えられる天国での恵みです。大淫婦は、最後の審判で滅びます。地上における一時的な富は築いても、永遠の天国では何も残りません。私たちは、一時的なものではなく、永遠に残るものを求めていくことが求められています。

このあと聖餐式に与ります。聖餐式により、私たちが神の刻印を受けた者であり、天国の恵みを求めて歩む者であることを確認して頂きたいと思えます。

### 「小羊の勝利」

申命記一〇章一二〜二二節、ヨハネの黙示録一七章六b〜一八節

二〇〇一年三月一日

この女を見て、わたしは大いに驚いたとヨハネは語ります。女とは、額に獣の刻印が押されている大淫婦としてのバビロン、神を忘れ偶像を拜んでいる大国です。天使は、この女についてその秘められた意味を説明します（八節）。「あなたが見た獣は以前はいたが、今はいない。やがて底なしの淵から上って来るが、ついには滅びてしまう」。獣はサタンである竜に仕える地上の王であり（一三章）、「今おられ、かつておられ、やがて来られる方」（一章四節）である主なる神と対比しています。時を支配しておられるのは主なる神です。信仰が与えられた者は、時代を超え、すべてを統治しておられる方の存在の故に、獣に対する恐れはありません。

「地上に住む者で、天地創造の時から命の書にその名が記されていない者たちは、以前いて今はいないこの獣が、やがて来るのを見て驚くであろう」（八節）。ヒットラーは、連合国に攻め込まれ自殺しました。しかししばらくは息を吹き返すのではと人々から恐れられていました。人々は恐怖を覚えており、後世に同じ恐怖が訪れることを恐れます。しかし神の子とされたキリスト者は恐れる必要はありません。その目印として、額に神の刻印が押されているからです。彼らは、我々の肉体を殺すことはできても、魂を殺すことはできないからです。そして彼らの支配は一時的であり、ついには滅びます。

九〜一一節は多くの神学者が、当時のローマ帝国の王たちのことを語っていると解釈しますが、私はそのようには解釈しません。一三章三節で語るように、バビロン、ローマ帝国、そしてヒットラーのドイツのように、サタンの虜となつた帝国は、繰り返し現れます。しかし、時代を経るとそうした大国も衰退し滅びます。しかし、時代を経て、新たな帝国が甦つたように再来します。ここではそのことを語っています。

しかし神の小羊は彼らに勝利します（一四節）。私たちが彼らと戦うことは恐ろしいことです。少しでも難を逃れんがために、彼らの要求に屈し、服従します。しかし私たちが支配しておられる方は、主なる神です。そして神の小羊であるキリストは、十字架に架かられ死を遂げられました。しかしキリストは、三日目の朝に肉体の死の支配に打ち勝たれ、復活されました。これは、サタンに対する勝利です。そして、獣・サタンの支配は、神によってすべて滅ぼされました。サタンの支配は、ローマ帝国のように何十年、何百年続いても、やがては滅びていきます。

私たちは、再臨のキリストにより、新しい体が与えられ、天国において永遠に生きることができます。ここに祝福があります。既に死に勝利された主が、最後にサタンに対する完全な勝利をもたらしてください。従って、信仰の故に戦いが必要なのであれば、私たちがまた信仰を守るために戦わなければなりません。「今は平和な時代だから、考えなくても良い」ということはありません。気が付いた時には偶像を拜んでいたというので

は手遅れです。

淫婦と獣は一体でしたが、内部分裂を起こし、衰退していきます（一五節）。権力闘争を起こすためです。結局のところ、サタンの働く力のある者たちは、サタンの故に一致団結をしているようであっても、自己欲の故に、権力闘争を起こします。しかし驚くべき事に、神が彼らを動かして、御自身の御心を行わせています（一七節、参照・ヨブ一〇二章）。

すべての時代、すべての空間を支配しておられるのは、主なる神です。神は、すでに御子の十字架と復活により死に打ち勝たれ、また最後の審判において、サタンに対する完全な勝利をもたらしてください。今の時代、神の御支配を、目で確認することはできません。しかし、今も永遠に神の御支配が、すべてに行き渡っています。聖書は語りまします。そして、すべてを御支配なさる神を信じるこそが、私たちに与えられた何よりの恵みであり祝福です（申命記一〇章一二〜一五節、二〇〜二二節）。

「大バビロンが倒れた」

エレミヤ書五〇章一七〜四〇節、ヨハネの黙示録一八章一〜八節

二〇〇一年三月一八日

大きな権威がある天使が、天から下ってきました（一節）。地上はその栄光によって輝いており、彼にはバビロン滅亡の宣言をする力が与えられています。この天使は、キリストの再臨の姿であると言つてよいでしょう。そして天使の語ることは、未来の出来事なのに、過去形で語ります。これは、神のご計画が確実に実行されることの表れです。神のご計画は、天地万物が創造される前に定まっております、その時が来れば、神はそのご計画に従

って、すべてを遂行されます。

裁きが確実に実行されることは、同時に神の民の救いも確実に実行されることを意味しています。すべての者は、サタンの影響下にあり、生まれながら罪を持ち、日々罪を犯し続けます。これは神の義・聖・真実に背くもので、滅びに値します。しかし神は、神の民とされた者たちを救ってください。これは、神が一方的にお与えくださった恵みです。しかし、エレミヤ書で主なる神がイスラエルを救い、バビロンを滅ぼされたように、大バビロンは滅びます（二b節）。「巣窟」は、「悪霊どもの隠れ家」（広辞苑）であり、ギリシヤ語では「投獄」を意味します。サタンは自らの罪の故に裁かれます。ウエストミンスター信仰告白は、「教会について」（二五章五節）で、興味深いことを語ります。「世にある最も純粹な教会も、混入物と誤りをまぬがれない（一）。そしてある教会は、地上には、御旨に従って神を礼拝する教会が、いつも存在する（三）。」（三）の証拠聖句が、この黙示録一八章二節です。神の宮としてのキリストの教会ですら、サタンの影響下に置かれ、サタンの会堂になるほど墮落することもあると語ります。宗教改革前夜のローマ教会は、まさにそのような状態でした。免罪符により、死んだ者の救いを売買していました。神の御言葉が語られなくなっていました。教会であつても、御言葉から離れると、サタンの巣となります。主イエスも、エルサレムの神殿からサタンの巣を追い出されました（マルコ一章一五〜一七節）。

神の刻印を受け、神の民とされたら、何を行つても良いのではありません。滅びに至る者であつた私がキリストの贖いにより、無償の救いに与つたことに対する感謝が、御言葉に聞き従う行為へと向けられていきます。逆に言えば、サタンの虜とされている状態がどのような状況であつたのかを、はつきりと知り、その罪の状態から決裂する必要があるま

す（四節）。  
一八章三節に、大バビロンの虜とされています者たちについて語られています。不道德、

性的乱れ、偶像崇拜、禁欲主義です。今の世の中は、著しく道徳的な乱れ、秩序が崩壊しています。政治、学校教育、社会がそうであり、教会もまたそれらの影響を大きく受けています。神の裁きは、神の義に背いた故です（五、八節）。神は、キリストにのみつながることにより、罪の赦しと永遠の生命に与ることができません。神の御言葉に示され、聖霊の働きにより罪の悔い改めと信仰の告白へと導かれる者は、救われます。

しかし私たちは、周囲の影響を大きく受けず。罪の世界を隔離することはできません。私たちは、罪に満ちた世界にも福音が伝えられるように、祈り続けなければなりません。そのために私たち自身が、この御言葉に立つ信仰に堅く立ち、神の武器を身に着ける必要があります。信仰を盾とし、救いを兜とし、霊の剣、神の言葉、絶え間ない祈りによって歩み続けることが求められています（エフェソ六章一〇〜一八節）。そうすれば、罪の影響を受けるのではなく、逆に神の真理が、私たちの信仰生活を通して証しされ、人々に対して影響を与え、神の真理が伝えられていくこととなります。このことが、教会の伝道にも繋がります。また社会における秩序回復へと結び付きます。滅ぼされる大バビロンから離れ、神の御言葉に聞き従っていくことが求められています。

「聖なる者たち、喜べ」

エレミヤ書五一章四六〜四九節、ヨハネの黙示録一八章九〜二四節

二〇〇一年三月二五日

現在の一般社会には、自分の身に災難が来なければ、何をやっていてもよいような風潮があります。そこには、「自分は犯罪者ではないし、被害を被ったわけではない」との思いがあるのでしょうか。しかし私たちは、周囲にある犯罪と同様に自らの罪があることに

気が付かなければなりません。主イエスは「あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか」（ルカ六章四一〜四二節）と語られているとおりでする。

黙示録には、都バビロンの滅びを見ている王たち、商人たち、船乗りたちが登場し、バビロンの滅びを嘆きます（一〇節、一六〜一七節、一九〜二〇節）。この言葉は、対岸の火事を嘆いているのであり、できれば自分に被害がもたらされないことを願っています。しかし王たちはどうだったか。サタンとのみだらな行為、つまり偶像崇拜やそれに伴う権力と利得を得ていました。彼らの嘆きは、バビロンではなく、自らの益がなくなることに對する嘆きです。商人たちや船乗りたちもまた、バビロンの繁栄の故に、贅沢品を商いし、潤っていました。彼らもまた、バビロンの滅びによる自らの損失を嘆きます。

一四節には、果物の売買について語ります。現在の日本は、景気に陰が潜んでいます。なおも飽食な時代です。食卓には、普通に食べ物が並びます。これらは、日本各地、世界各国から集められています。私たちは、これらが神から与えられた恵みとして感謝の生活を忘れると、ここに記されている人々と同じ罪に陥る危険性があります。

これらの王たち、商人たち、船乗りたちの嘆きには、共通していることがあります。第一にその滅びは一瞬におとされます（一〇、一七、一九節）。地震などの災害は一瞬のうちには発生し、その時、私たちは立ち竦んで何もできません。災害に備えが必要であると言われるように、主の裁きに對する備えが必要です。

またその時、すべてが荒れ果ててしまいます（一七、一九節）。自然災害は一部の地域にとつては壊滅的な被害をもたらしますが、それでも部分的です。しかし、神の裁きは例外なくすべてに渡ります。そしてその時には、周囲の人々もまた手助けをすることができず、見ているだけで、バビロンに属するものはすべて倒れます（エレミヤ五一章四七節）。一方神の裁きは、天に属する者には、喜びの訪れです（二〇節、エレミヤ五一章四八〜四九節）。王たち、商人たち、船乗りたちは、地上に属する者です。彼らは、神を信じる



ことを拒否し、神を否定し、冒瀆していました。しかし、神を信じている者は、天に属し救われます。私たちは、現在地上に身を置いており、罪を犯し続けています。しかし神は、私たちを天に属する者としてくださり、イエス・キリストによる十字架の贖いをお与えくださいました。キリストの十字架の贖いにより、私たちの罪は赦されました。そして私たちの国籍はすでに天国にあります（フィリピ三章二〇節）。

地上の都バビロンは、完全に滅ぼし尽くされますが、天にある都エルサレムは、永遠の栄えがあります。そしてその時にはもう、サタンによる迫害はなく、罪の混入もありません。私たちは、神の栄光を称え、讃美する者とされる祝福に満たされています。

### 「地上の権力者の滅び」

エレミヤ書五一章四六〜四九節、ヨハネの黙示録一八章九〜二四節

二〇〇一年四月一日

皆さんは日頃の生活で、どれだけ神を意識して生きていますか？ もしかしたら神を知らない人たちと全く変わらない生活をしているかもしれません。ウエストミンスター小教理問答問一は次のように語ります。「人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことです」。また創立宣言では「有神的人生観乃至世界観こそ新日本建設の唯一の確なる基礎なりとは、日本基督改革派教会の主張の第一点にして、我等の熱心此処に在り」と語ります。

有神論的人生観世界観は、今では難しい言葉となつていますが、パウロが語るように（Iコリント一〇章三一節）、食べること、飲むこと、日常生活の何をするにしても、神の栄光を称え、感謝を覚えつつ、行うことです。神を覚えての行動と、覚えぬの行動は、

外見的には区別が付きません。しかし、実際に向かっています方向は全く異なります。何事を行うにも、神の栄光を称えつつ行うことは、地域の人々に、社会に、聖書の御言葉に従って生きる者の生活を通して、神の秩序が示され、さらに地上における神の国が実現へと向かっています。

今日のみ言葉は、神を覚えない生活をする者の行く末が語られています。

最初は芸術家たちです（二二節a）。バビロンの崩壊により、芸術家もその命を失います。音楽にしろ絵画にしろ、すべての芸術が金儲けの道具として用いられていたからです。バビロンに属する人たちが滅ぼされることにより、彼ら自身の芸術の力もまた無意味なものとなり、廃れます。一方、神を信じている者たちの音楽は、黙示録でも何度か出てきましたが、天国での神の栄光を称える讃美につながります。神への讃美は、同時に人々にも感動を与え、神の恵みを知らせるものとなります。

次に技術家たちもいなくなります（二二節b）。社会における労働です。天地万物を神が創造された時、人間は地を従わせ、海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物のすべてを支配しつつ（創世記一章二八節）、神の栄光を称える存在として創造されました。しかしアダムとエバが罪を犯して以来、人間は生涯食べ物を得ようとして苦しむ存在とされました（創世記三章一八〜一九節）。塵にすぎない存在となった人間は、塵に返るよう定められました。そして人々は、自らの食料を得るための労働を行うようになりました。その行く末は滅びです。一方キリスト者の労働は、労働によって神がお与えくださった恵みへの感謝が生じる生活へと変えられて行きます（参照・Iコリント三章一一〜一五節）。

最後には、生活・家庭まで失われていきます。家庭やそれに伴う生活も、神が定めてくださいました（創世記二章一八節、二一〜二四節）。神は、人間が互いに助け合うことによつて、神を讃美しつつ、神の国の完成へと歩むようにと示されていますが、そこに罪が混入して変化しました。しかし罪の中、滅びに向かっている者に対して、主イエスは「一人が神を信じれば、家族が救われる」ことをお語りくださり、なおも家庭の働きをお

語りくださいました。家族により神の国の完成へと向かいます。しかしバビロンが滅びる時、神を忘れた家庭は、その働きを終えます。

そして、もはや芸術も労働も生活も家庭も、すべてが消え失せます。地上におけるその働きを終えます。それは、大きいひき臼のような石を取り上げ、それを海に投げ込み、沈み、もう二度と引き上げられないように、罪に満ちた世界は葬り去られます。エレミヤ書五一章六三、六四節の成就です。

これは、サタンの支配にある権力者、商人となったからであり、神の民を惑わし、殺したからです（二三、二四節、エレミヤ五一章四七、四九節）。すべてが滅ぼされたのは、地上におけるその働きをすべて終えたからです。すべての聖なる神の民は、キリストによる十字架の贖いを信じ、信仰を告白し、神の御許に集められます。この時、地上において神の栄光を称えつつ、讚美し、働き、生活をしていたキリスト者は、神の国、天国に導かれ、永遠に神の栄光を称えつつ喜び者とされます。聖餐式は、既に信仰を告白した者が、神の国の約束が与えられていますことを確認することために、イエス・キリストが聖定してくださいました。永遠の生命の約束に感謝しましょう。

## 「ハレルヤ」

### 詩編一〇六章三九、四八節、ヨハネの黙示録一九章一、四節

二〇〇一年四月八日

今日から、受難週に入ります。御子イエス・キリストの苦しみを覚えつつ、御子の地上での遜りの歩み、十字架の御業を、私たちは改めて覚えたいと思います。

一八章までは、迫害と裁きの連続で、重苦しく感じられました。しかし今日の御言葉からは、一転して主に対する祝福の言葉が語られています。つまり、黙示録は最後の部分に、

主の勝利と神の民による主への讚美が語られているからこそ、私たちは、救われ、神の民とされていることの喜びを覚えることができます。これは新共同訳聖書の段落分けで、このテキストが、一八章一節「バビロンの滅亡」に位置づけられていることから確認できます。

バビロンが滅ぼされた時、天上で大群衆による大讚美がありました（参照五、七章）。ところが、ここではもう神の国が完成した喜びの讚美です。

私たちは二〇人足らずで礼拝を守り、讚美していると忘れがちですが、すべての神の民が集う讚美の素晴らしさを知っていただきたいと思えます。今月、東部中会五五周年記念信徒大会が行われますが、それですら一〇〇〇余人です。これでも、天上の民の極々一部の民が集っていますに過ぎません。

天上における大群衆の讚美は、「ハレルヤ」で始まります。これはヘブライ語で「主（ヤー）を讚美せよ（ハレルー）」を意味します。新約聖書では、この一九章一、六節に四回出てきているだけで、旧約聖書でも詩編に出てくるだけです。多くは、詩編一〇六編四八節のように最後の言葉や呼びかけとして用いられています。

私たちは、礼拝に与り主を讚美していますが、礼拝で特別改まって行うのではなく、日々の生活において、主を讚美する者でなければなりません。何故か、神はサタンに勝利されたからです。キリストは十字架において死を遂げられ、死に打ち勝たれ復活されました。このことにより、主はサタンの支配に打ち勝たれました。新約・終末の時代、なおもサタンの力の下にあります。これはいわばサタンの最後のあがきです。教会は迫害の歴史があります。しかしこれは神がお与えくださる神の国の時からすると、一瞬のことです。私たちはその時以降、永遠に主の祝福に入れられ、永遠に主を讚美し続けます。だからこそ地上の生涯にあっても、私たちは常にこの喜びに満たされています。主を讚美することは、礼拝での特別な行為ではなく、日常の生活の一部分であっていただきたいと思えます。

「救いと栄光と力とは、私たちの神のもの」と讚美が続きます。バビロンが滅ぼされる

ことにより、サタンに救いはなくなり、宝、富、権威、武力の一切が滅ぼされ、地上には栄光がありません。そしてサタンには力がなくなり、地上にあり、救いと栄光と力を求めてきた者たちがすべて滅ぼされた結果、真実の救い、栄光、力が残り、露わになります。

主イエスは、家を建てる時には、岩の上に家を建てるように語られました（マタイ七章二四〜二七節）。家を建てる時、表面上は土があり、土台が岩か、沼かの区別は付きません。しかし洪水や地震で、初めてその家の土台が岩地か沼地かが明らかになります。私たちの今生きている地上もまた同じです。表面的には富・権威を持つ者が幸福な者であるかの如くであり、また多くの人々がそれらを追い求めます。しかし最後の審判が来て、雨風にさらされた時、そこに残るものは、岩である神の救いと栄光と力です。

二十四人の長老と四つの生き物もひれ伏して、神を礼拝して語ります（四節）。「アーメン、ハレルヤ」。彼らは四章四節などで既に出てきたが、天上において全聖徒を代表する者たちであり、五章九〜一〇節で小羊である主イエスに対し語っていました。そして今「アーメン、ハレルヤ（その通りです。主を讚美します）」と語ります。すべては成し遂げられました。それは、単に大バビロンが滅び去っただけではなく、同時に小羊たるイエス・キリストの血による贖いが完成しました。つまり、二〇〇〇年前になされたキリストの十字架の御業により、神の民の罪の償いの代価が支払われ、救いの約束がされました。その罪の赦しと救いが、大バビロンが滅びた時、完成します。

私たちは、地上にあり風雨にされされることにより失われていくものではなく、常に岩盤を貫き、永遠に取り去られることのない神の御言葉を持ち続けなければなりません。

「神の栄光をたたえよう」 詩編一一五章一〜一八節、ヨハネの黙示録一九章五〜一〇節

二〇〇一年四月一五日

昨日、手紙が届きました。この教会で夏期伝道奉仕をしてくださったN牧師が結婚されたという報告です。

聖書では信仰について述べる時、神と神の民の結婚であると語ります（例・ホセア二章二一、二二節、イザヤ五四章五節）。旧約聖書で、イスラエルが他の国々の宗教、特にカナン人の宗教など偶像崇拜を繰り返すことが、神に対する姦淫の罪であるのは、神とイスラエルが結婚関係にあるからです。

また新約聖書でも、キリストが花婿であり、キリストの教会・神の民が花嫁であると語ります（エフェソ五章二二〜二八節）。キリストが教会の頭です。キリストが教会を愛し、教会のために御自分をお与えになりました。結婚を行う時、親族は、その結婚が相応しいか気にします。キリストは神の御子であり、罪も汚れもないお方です。一方、地上の教会・キリスト者一人ひとりには、罪に汚れています。しかしキリストは教会を愛し、結婚してくださいました。その為に、キリストの十字架と復活の御業が必要でした。キリストの御業の故に、神の民は、あたかも罪がない者とされたのであり、同時に教会を全く聖いものにし、罪によるシミ、汚れがなく、栄光の姿の教会として、キリストの花嫁として相応しいものとしてくださいました。

N牧師の結婚報告にも写真があり、先生と共に純白なウェディングドレスを着た奥さんが写っていますが、神の国における結婚式でも、花嫁は輝く清い麻の布を着ます（七〜八節）。この花嫁の姿は、大淫婦（一八章一六節）の派手派手しい姿とは対照的に描かれています。

周囲のサタンとその配下にあつたあらゆるものが消え去った時、初めてすべての準備が整い、結婚披露宴が始まります。結婚式において、本人たちが神の御前にあつて誓約を行う時、そこに出席している人たちもまた、その結婚の証人となり、その結婚に同意します。

が、小羊たるキリストと花嫁としての教会の婚礼でも同じです。現在でもサタンは、教会を自らの支配下に置くがために、攻撃を仕掛けてきます。結婚に対する反対者がいる限り結婚式は始まりません。サタンが退出し、全能者であり、私たちの神である主が王となられた時（六節）、結婚式が始まります。

この麻の衣とは、「聖なる者たちの正しい行いである」（八節）と語ります。これは私たちの善行の故ではありません。私たちは罪に汚れています。キリストの地上の生涯で律法をまっとうされ、十字架による罪の償いを成し遂げてくださったことにより、私たちは罪がなかったものとされました。これは、神からの一方的な恵みであり、私たちは聖とされ、義と認められました。だからこそ私たちは神を信じ、感謝し、礼拝に与ります（五節、詩編一一五編一三節）。

すべての神の僕は、ただ神を畏れることで一致しており、子供も大人も、身分も、人種も、そこには分け隔てがありません（参照・五章九節、七章九節、一四章六節）。天上における結婚式に集うことができるのは、神によって贖われ、神を畏れる者です。今、世の中は不景気であり、生存競争はとても激しい状況です。人を蹴落とさなければ、生き残れません。しかし、天上の結婚式に招かれるには、ただ神を信じ、畏れることです。

小羊の婚宴に招かれている者は幸いです（九節）。神の御言葉は、揺るぎません。真実です。ここに幸いがあります。聖餐式は、キリストの十字架の体と血とを想起しますが、同時に天国における婚宴の前味を味わっています（マタイ二六章二六、二九節）。また主イエスも語られています。「言っておくが、いつか、東や西から大勢の人が来て、天の国でアブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席に着く」（マタイ八章一一節）。

「神を礼拝せよ。イエスの証しは預言の霊なのだ」（一〇節）。御子イエス・キリストの十字架の御業により、罪の死から解放され、天国の婚礼に招かれていますことを感謝し、神の栄光を讃え、神を礼拝し続けていきたいと思えます。

### 「誠実・真実な方」

イザヤ書一一章一〇節、ヨハネの黙示録一九章一一、一二節

二〇〇一年四月二二日

一九章一一節は、白馬に乗った王子様のイメージがありますが、六章二節からこの方が、すべてに勝利を治めるキリストが再臨された状態であることがわかります。この方は、誠実・真実（一一節）、神の言葉（一三節）、王の王・主の主（一六節）と呼ばれています。「名は体を表す」と言われますが、聖書においても、名はその人の本質を語る言葉として語られています。キリストの場合まさにそうです。これらの名は、終末の時代、人々が神を忘れ、自分勝手に歩み、社会・秩序を乱して生活している時に、この世のすべてを支配している方・この世のすべての秩序を整えてくださる方がここにおられることを語っています。

「誠実」は、口語訳・新改訳聖書では「忠実」と訳されてきました。「信仰深い、真実である」という意味です。その方は正義をもって裁き、また戦われます（一一節）。この誠実さ・真実さは、父なる神に向けられたもので、それがキリスト者に伝えられました。神は、完全に聖・義・真実な方で、欠けたものはありません。その規準は、神の律法です。現在自民党の総裁選が行われていますが、総裁が代わるごとにその規則も変更されると言われています。そうした自分たちで定めた規準は、あくまで相対的であり、絶対的な基準とは異なります。絶対的な基準が、神の義・聖・真実が示されている神の律法にあります。

しかしどれだけ素晴らしい実績をあげた人であっても、生まれながら持っている罪があり、律法に照らした時、日々罪を犯しています。自分の規準では正しくても、神の義に照らすとそうではありません。行いにおいて誰からも咎められる行動をしていなくても、人

間は罪人です。言葉や心の中で罪を犯しています。そのすべての罪が、神の御前で死に値します。

この罪の裁きから逃れることのできる者は誰一人いません。ただ神の愛により、神によって捉えられ、キリストの十字架が私たちの罪の刑罰の代償であることが示された者のみが、そこから逃れることができます。

イザヤ一四章四〜五節の預言は、私たちの罪を救ってくださいと救い主を預言しているだけではなく、その方は同時に裁きを行われる方であることも語ります。神の救いに与る者は、自分で神の裁きに絶えられないようになる強い人間ではなく、自分自身ではこの罪をどうすることができないことが示され、ただキリストにより頼む弱さを持つている者です。キリストに与えられた誠実・真実と言う名は、神の律法に対して欠けがなく、真実な方であるために与えられた称号です。また、キリストに依り頼む者に対して救いをお与えくださる契約が、真実であることを語っています。そしてこの神の真実に合致しない者に対する裁きがあります。

神の言葉には、救いが提供されています。これは神が恐ろしい神ではなく、神の言葉は、人々に救いをもたらしてくださった愛の神であることを示します。人間は罪に汚れており神を知ることができません。救いを求めることもできません。それを示してくださいと神の御言葉です。

私たちは、御言葉が提供されつつ、御言葉に委ねることをせず、自分勝手な生活を行っていき、それはサタンの働きの故ですが、救いの提供を拒否している故に、神の裁きもたらされます。

現在では、聖書は一般の書物に過ぎず、多くの書物に埋もれています。しかし神の御言葉は、鋭い剣であり、力があります。私たちは、この鋭い剣が与えられています。常に研ぎ澄まし、いつでも戦える状態である必要があります。

神は王の王・主の主であられ、世界を統治されています。現在あらゆる権威が失われ、

神も否定される時代です。しかし、人間の側が神の存在を否定しても、神が王の王、主の主として存在されていることは否定できません。そして、神の言葉が示されつつも、地上の権力・富に満たされて、主を否定する者の行く末は、一八、二〇〜二一節に示されています。私たちに、今、神の言葉により神が示され、神によって罪が赦され、永遠の生命が約束されています。神の権威を認め、キリストの語る御言葉に聞き従っていきたく思います。

## 「千年王国」 イザヤ書二四章一〜二三節、ヨハネの黙示録二〇章一〜六節

二〇〇一年四月二十九日

千年王国については改革派教会内においても議論がされるテキストです。

大きく三つの解釈があります。最初は千年王国後再臨説（千年王国↓再臨）です。この考え方は、神の国は福音の宣教を通し、また個々人の心の中の聖霊の救いをもたらす働きを通して、この世に行き渡り、今の世におけるキリストの御支配のゆえに再臨の時まで世界は着実に改善され、千年の義と平和の祝福の期間を経て再臨があると解釈します。

第二は、千年王国前再臨説（再臨↓千年王国）です。この解釈は、一九章においてキリストの再臨があり、それに続けて千年王国があるとして、聖書を字義通り解釈する人たちが多く採用します。

最後は、無千年王国説であり、私もこの立場です。この解釈では、千年王国を聖書は教えないと解釈します。それは、黙示録を比喩的・象徴的に解釈し、ここに出てくる「千年」は期間ではなく、完全という思想を象徴とするためです。黙示録ですでに様々な数字が出てきました。一四四〇〇〇人（七章四節）、四二ヶ月・一二六〇日（一章二、

三節)、六六六(一三章一八節)……。これらの数字を象徴的に解釈してきて、いきなり千年王国だけは、字義通り読むことはできないと思います。また聖書全体を通して考えても、千年王国があるのであれば、他の聖書箇所でも取り上げられているはずです。

二〇〇〇年の教会の歴史の中、今なお解釈が分かれるのは、黙示録が黙示であり、さらにはせん状に語られているからです。改革派教会は、六〇周年記念宣言での終末論を採択するため、それに期待したいと思います(二〇〇六年採択)。

では千年王国がないと解釈すれば、このテキストをどのように解釈すればよいでしょうか。二〇〇〇年前、すでにキリストは十字架の死と死からの復活を遂げられ、サタンに完全に勝利されました。新約の時代、サタンの残滓があるが、全勢力が私たちに向けられることはありません(二節)。そして千年王国については、完全な栄光ある勝利がすでもたらされています。サタンはすでに、底知れぬ所に縛られ、教会の世界宣教の活動を阻止することはできません。竜はしばらくの間解放されています(三節)が、これはある程度の範囲内でサタンが活動と力を持ち続けることを語っています。つまり、一三節を簡単に言い直すと、キリストが十字架の死と復活により、サタンに勝利された事により、蛇・竜と呼ばれるサタンは、神の民を惑わすような身動きができない状態にされています。しかし、竜は神が許容する範囲においてその活動が許されています。

四節にはキリスト者の姿を語ります。そして五節には第一の復活について語ります。これは新生についてです(参照・ヨハネ福音書三章三、八節)。新生を遂げた者は、肉体の死を遂げても神の栄光の内にあります(ルカ福音書二二章四三節、ウエストミンスター信仰告白三二章一節)。第一の復活にある者は聖なる者です(六節)。

そして、第一の復活にあるキリスト者には、第二の死はおよびません。第二の死とは、二〇章一四節にも語られるように、永遠の裁きによる死のことです。キリストに結ばれ、新生された者には、もう最後の審判による刑罰は及びません。キリストの贖いによる永遠の生命と祝福にあることに感謝しましょう。

### 「神の裁き」 エゼキエル書三三章一〜二三節、ヨハネの黙示録二〇章七〜一五節

二〇〇一年五月六日

千年王国に続き、最後の審判が二つの角度から語られます。最後の審判を前にして、サタンの力が世に渡りません(七、八節)。それをゴグとマゴグです。これらの力は、実在したものとではなく、終末に現れるものとして描かれています。このことはエゼキエル三三〜三九章で預言されています。終末の時代、キリスト者は迫害に遭いますが、それがゴグとマゴグの力によりません。彼らは、主なる神の言葉が発せられて、世界中に派遣されられます(三三章一八節)。黙示録では、千年間捕らえられていたサタンが解放されてゴグとマゴグが出てきます。エゼキエル書同様、神の許可により、その働きが可能となります。ヨブ記一〜二章に神とサタンの会話がありますが、まさしくサタンは神の支配の下にあり、主なる神の許可がなければ、この世において僅かにでも働くことができません。従って、ゴグとマゴグの勢力が海の砂のように多いとしても、キリストに結ばれています。キリスト者は、恐れる必要はありません。私たちは、神の御子イエス・キリストの十字架と復活の御業により、すでに罪の赦しが与えられ、サタンに対する勝利が約束されています。聖なる者とされるキリスト者は地上の広い場所に集まります(九節)。先週、東部中会創立五五周年記念信徒大会が行われました。一三〇〇人位の人たちです。しかし神の御国を構成する人々は、こんなに僅かな人数ではありません。数え切れない人々が一箇所を集められます。それだけ広い場所です。旧約時代に活躍した人たちが、主イエスの働かれた時期の使徒たち、そして新約の教会を形成したすべての神の民がそこに含まれています。

そこにゴグとマゴグが攻めてきても、獣や偽預言者の如くに滅ぼされます(九、一〇

節)。主なる神が勝利され、サタンは完全に滅んだからです。そして神によって召されていた神の民は、永遠の祝福に満たされます。

ヨハネは最後の審判をくだされる方を見ます(一一節)。その時が来れば、現在ある天も地も役目は終え、新天新地の世界となります。そしてすべての人間が復活に与ります(一二節)。裁きの為です。裁判の証拠として挙げられているのが幾つかの書物と命の書です。最初の書物には、裁きに遭う人個人の全生涯の記録が記されています。行い・発言・心のすべてです。そして命の書には、神の民とされた者の名が記されています。

もし命の書が証拠として取り上げられなければ、この法廷にのぼるすべて、つまり全人類は、罪の故に有罪と裁決され、火の池に投げ込まれます。行いに応じて裁かれるため、罪の大きい・小さいは多少ありますが、有罪が無罪になる者は一人もいません。火の池に投げ込まれ、第二の死を遂げます。しかし火の池に投げ込まれ第二の死を遂げるのは、神の民とされていない者たちだけです。キリスト者は命の書に名が記されています。だからこそキリスト者は、キリストの十字架の御業の故に、罪が赦され、聖なる者とされ、無罪と宣言されます(三章五節、イザヤ四章三・四節など)。

キリスト者である私たちが、最後の審判において罪の赦しが宣言され、天国の栄光に与ることの確信が与えられるのは、すでにその名が命の書に書き記されているからです。私たちは聖餐式に与ることにより、命の書に名が記されていることを、信仰の目を持って確認し、神の民であることを共に喜ぶことができます。まだ信仰を告白されていない未陪餐会員、未信者の方々は、今は聖餐に与れませんが、主はそういった方々もまた命の書に名を記してくださっていることへの確信をお与えくださり、自らの口で信仰を告白する時を備えてくださっていることを覚え、祈り続けていきましょう。

「神の都」 イザヤ書六五章一七・二〇節、ヨハネの黙示録二一章一・八節  
二〇〇一年五月一三日

キリスト教の究極的な目標は何か？ いろんな答えがあります。「救われること」でしょうか。キリストの十字架の御業により、罪から救われたことは中心的な出来事です。しかし神の国における永遠の生命を忘れてはなりません。永遠の生命の約束があるからこそ、地上での私たちの生涯で問題となる「死」の問題も乗り越えることができます。つまり私たちが信仰を持つことは、地上の歩みにおいて、単に生きる希望が与えられただけではなく、肉の死、復活、神の国での永遠の生命にまでつながります。そうすれば、「クリスチャンになってもなぜ、こんなに労苦が多いのか？」と言った疑問は出てこなくなりません。私たちが求めるのは、この世的な幸福ではなく、神の国の祝福です。

キリストの十字架による贖いに与った者のみが、無罪と宣言され、新天新地に臨むことができます(一節)。このことをイザヤ書では創造であると語ります(六五章一七節)。最後の審判においてサタンに勝利された神は、もう一度天地を創造され、神の国を完成させます。しかしここにはもう海はありません。海は、罪の中にあつた人間にとり、嵐や暴風雨による死・苦しみイメージです。しかし新天新地では、サタンはおらず、死もなく、悲しみも嘆きも労苦もありません(四節)。だから海も必要ありません(参照・イザヤ六五章一八・二〇節)。

またキリスト者に与えられた新天新地は、神も共に住まわれ、顔と顔を合わせる事ができる場所です(三・四節)。インマヌエル(マタイ一章二三節)が現実のものとなります。神は単に一緒にいてくださるだけではありません(四節)。黙示録では、地上の生涯における迫害と苦しみに耐えることを語ってきました。しかし主なる神は、一緒にいてくださり、地上の生涯にある時の私たちの涙をことごとく拭い去ってくださいます。新天新

地には、もう苦しみも悩みも死もありません。

ここに神の人間の救いの御業は完成し、人間の立場としては神を信仰することの目標が達成されます。そしてここに初めて神の被造物としての人間の真の生きる目的である神の栄光を讃え、永遠の神を喜び、礼拝し続けることが可能となります。

そして聖書はそのことが信頼でき真実であると語ります(五節)。私たちは聖書の言葉を、神の御言葉として、すべてを信じます。しかし近年のキリスト教会には、奇蹟など聖書の言葉を否定する教会もあります。そういったことに対する警告がここに語られています。死者の復活や不死は、人間が追い求めてきたことですが、できないものと考えてきました。しかし聖書はそれが信仰によって可能であり真実であると証言します。聖書が「これらの言葉は信頼でき、また真実である」と語るは、神の国こそ、私たち神を信じる者の究極の目標であり、これを除いてはありえませんが。

そして神は「事は成就した」と語られます。天地万物を創造された神は、旧約・新約の歴史を通し、神の民を救い、そしてそれを神の国によって完成されました。最初に、キリスト者の目標として「救われた」だけで終わってはならないと語りましたが、神の救いの御業は、ここに集う私たち一人ひとりが主に捉えられ、信仰を告白するにいたることは、あくまで途中の段階であり、この新天地が完成し、神と顔と顔を合わせ、永遠の生命が与えられ、楽しみと喜びとに満たされて、初めて完成したと言えます。そうして神の御業は成就します。だからこそ神は御自身を、「わたしはアルファであり、オメガである。初めであり、終わりである」と語られます。

聖書の言葉を、空想物語として人間的に否定することは簡単にできます。しかし、疑う者ではなく、聖霊の働きによる信仰を告白する者であり、神による勝利者として新天地を受け継ぐ者であり続けたいものです。

「神の都」 イザヤ書六〇章一〜七節、ヨハネの黙示録二一章九〜二二節  
二〇〇一年五月二〇日

最後の審判においてサタンは滅ぼされ、神の国の到来がここに語られています。その時、クリスチャンは、喜び、晴れやかに神の国に招かれていきます(イザヤ六〇章一〜五節)。テレビでマンシヨンの間取り紹介などが行われますが、ここでは私たちの招かれる神の都の紹介がされています。

神の都は、小羊の妻つまりキリストの花嫁としての栄光の教会です(九節)。私たちは地上の見える教会に集っています。神の都はキリストの十字架の贖いに与ったすべてのクリスチャンが集います。時代・地域は、ここでは関係ありません。またここでは既に罪はなく、苦しみも誘惑・迫害もありません。

また、神の都は父なる神のもとにあり、現在の天・地に代わって与えられます(一〇、一一節)。そしてそこに招かれるクリスチャンは”霊”に満たされています(一〇節)。つまり神の都は、父・子・御霊の三位一体なる神の御支配にあり、サタンが滅ぼされ、この都は神の栄光に輝いています(一一節)。それを邪魔する者は、ここにはいません。三位一体の御支配と栄光に満たされている場に、クリスチャンは招かれます。

ここに神の都の大きさが具体的に記されています(一六節)。一二〇〇〇スタディオンの(約二二二〇km)四方です。この大きさはオーストラリア大陸を少し小さくした大きさです。この大きさが大きいのか小さいのかは、議論があります。しかし黙示録において記されています。数字はその意味を考えなければなりません。七章では神の刻印を押された神の民が一四四〇〇〇人(一部族一二〇〇〇人)と語られていました。ここでも同じであり、神が選ばれたすべて民が十分に住むことのできる広さのことです。そのことを主イエスは証言し



てくださっています（ヨハネ福音書一四章一〜四節）。

城壁は一四四ペキス（約六四・八m）は、神の都の大きさに比べてそれ程高くありません。攻めてくる敵もないため、高くする必要ありません。この壁は神の保護下にあることの確認するためにすぎません。

神の都には一二の門があります（一二〜一四節）。ここにイスラエルの一二部族の名があり、さらに一二の土台には小羊の一二使徒の名があります。これは旧約のイスラエルの民、新約の教会の時代のクリスチャンのすべてが、この神の都に招かれていることを語っています（参照・エフェソ二章一八〜二二節）。

そして二一章一八節以下では、神の都の輝かしい姿が明らかにされます。これらの高価な宝石を、個々に意味を考えることは必要なく、全体として、神の御栄光に包まれた光り輝く世界に目を留めていただければ結構です。

この時、私たちのクリスチャン生活について考えてみましょう。クリスチャンは一般に豪華な生活は否定され、質素な生活が求められています。なぜ、神の都のように豪華さを求めては行けないのか？ 豪華な生活は神を証しするように見えて、自分自身の権威・栄光を求めることになるからです。主イエスもこのように語っておられます。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」（ルカ一八章二四〜二五節）。私たちが、地上の生活にあつて財産を蓄え、着飾ることにより、自分自身に栄光・権威をもたらすことは、私たちに残されている罪です。神の都に入られるクリスチャンは、神の御栄光の故に、祝福され、恵みに入れられています。神の都に招かれています。私たちの生活は、それに相応しい者として、神から与えられた御言葉に聞き従う事であり、またそうした私たちを通して、御霊の働きにより、神の御栄光が人々に伝えられていきます。

## 「神の都の内」 イザヤ書六〇章一四〜二二節、ヨハネの黙示録二一章二二〜二七節 二〇〇一年五月二七日

神を信じていない人たちに、天国について語ると、現実逃避だと語られるかも知れませんが、しかし、地上の生涯を終えたクリスチャンが、キリストの贖いにより罪の赦しを受け、永遠の生命を確認し、それを喜ぶことは、何も空想物語でも現実逃避でもなく、クリスチャンの特権であり喜びです。また天国があるからこそ、今に生きる私たちは、信仰の戦いもできます。

ヨハネは都の中に神殿を見ませんでした（二二節）。黙示録が書かれた当時（一世紀末）にはすでにエルサレム神殿は破壊されていました（AD七〇年）。しかし、多くの人は神殿を求めていたことでしょう。そもそも神殿は、出エジプトの時に、主なる神が幕屋建設を指示したことから始まります（出エジプト二五章八節）。つまり、人々にとつて、神殿において礼拝を献げることが、神との交わりの回復を象徴するものとされてきました。しかしながら、神の都では神殿は必要ありません。全能者である神、主と小羊とが都の神殿だからです。神殿は神が人々の前に居られないからこそ必要であり、神の都では、父なる神・小羊たる御子イエス・キリスト、御霊、つまり三位一体なる神が、私たちの目の前に居られるからこそ、あえて神殿を造る必要はありません。主イエスも、十字架と復活を語られる時、御自身のことを神殿に例えられていました（ヨハネ福音書二章一九〜二二節）。神殿は、神がその場に居られないからこそ必要であつて、この場に居られる状態では必要ではありません。

そういうことでは、現在も、この場に聖霊なる神が宿っておられ、御子・父なる神との繋がりがあり、神殿は必要なく、私たちは、教会堂において礼拝をささげています。そしてこの神の都では、太陽も月も、必要ではありません。神の栄光が都を照らしてい

るからです（二三節、参照・イザヤ六〇章一九節）。そもそも太陽も月も神の被造物であり（創世記一章一四〜一九節）、神の統治下にあります。被造物の輝きは、創造主の輝きに優ることはありません。

また天国には夜がありません（二五節）。そこに集う神の民が休む必要がないからです。天地創造の時に神が夜と昼を創られたのは、人間が地上の労働において疲れ、休息が必要であったからであり、天国では必要ありません。永遠に生きる者とされたクリスチャンは、疲れることもなく神の御栄光を讃えつつ、歩み続けることができます。

天国には諸国の王も集います（二四節）。栄光に満ちた神が、権威者であられ、王の王で在られることが、天国ではつきりと示されます。

そしてこの神の国に誰が招かれていくかが改めて語られます（二六〜二七節）。私たちはクリスチャンとされました。しかし今なお罪人です。地上の生涯において、完全に聖化されることはありません。私たちの罪の汚れの贖いは、クリストの十字架によって与えられました。それ故に、罪がなかった聖い者の如くに見なされるようにされました。そしてクリストの十字架を信じる者には、小羊の命の書に、その名が、書き記されています。言い換えると、小羊の命の書に私たちの名があるからこそ、主なる神は聖霊を通して、私たちに信仰をお与えくださいました。

私たちは、主によってクリスチャンとされました。クリスチャンは、神の御栄光がみながる神の国において、永遠の生命が与えられます。私たちは神の国で、神の御栄光を讃えて歩み続けます。それは同時に、この世の歩みにあっても、神の御栄光が私たちの生活によって人々に伝えられていく使命が与えられています。今なお、罪が残っており、神の栄光を曇らせ暗くしたり、不正や不義によって神の栄光が歪められています。しかし、私たちが神の栄光を帰する信仰の故に、人々にも神を伝えられていきます。神の国を見据えて、歩み続けていきましょう。

## 「命の川、命の木」

### 創世記二章四〜一四節、ヨハネの黙示録二二章一〜五節

二〇〇一年六月三日

創世記二章と黙示録二二章は、時間の隔たりがあるにも関わらず連続している如く読むことができます。それは神は最初から天地創造の完成として、神の都を予定していたからです。そして、この間に挟まれている聖書のほとんどが、人間の罪と、神による罪からの赦しについてです。

アダムとエバは、罪を犯しエデンの園を追い出され、それ以来、労働の苦しみ、罪の刑罰の死を背負い続けてきました。今もです。この人間が、エルサレムの都に導かれることは、クリストの十字架と復活により、神による罪の赦し・神との交わりの回復がなされた結果です。

神の都に命の水の川があります（一〜二節）。今日はペンテコステ（聖霊降臨節）ですが、主イエスは水と聖霊の関係を語っています（ヨハネ福音書七章三七〜三九節）。神の都に命の水の川が満ち溢れているのは、神の都に神の御霊に満ちていることを物語っています。それは、この川が神と小羊の玉座から流れ、神に起源を持つことから分かります。しかし、現在は主イエスも天に座しておられ、私たちは見ることができません。聖霊も目には見えません。だからこそ、神を否定する人たちは、神の存在・聖霊の存在を信じている私たちを笑うかも知れません。しかし、主イエスが地上に居られた時でさえ、ユダヤ人たちは、主イエスを神の御子と信じていることができませんでした。そして主イエスを十字架に架けました。私たちが神を知り、信じていることができるのは、聖霊の働きの故です。私

創世記では、命の木と共に善悪の知識の木がありました。しかし神の都には存在しませ

ん（二節）。和解させられた神の民は、もう追放されることはありません。命の木は、人に永遠の生命を与えます（創世記三章二二節）。

命の木は、常に実を実らせており、神の民に豊かな恵みを常に与えます。またその木の葉は、諸国の民を治します。神の都では既に罪も汚れも死も病もないため、神の民は更なる健康が与えられることとなります。

すでにサタンとそこにある呪いは絶滅しました。従って罪もありません。だからこそ、キリストの十字架と復活を信じるキリスト者は、神の都にあつて平安が与えられています。

そして、神と小羊の玉座にあつて、クリスチャンは神を礼拝し続けます。この玉座は、単数であり一つです。この玉座から流れ出る川の水の如くに、聖霊が神の都中に充滿しています。そこに集うキリスト者は、この三位一体なる神の御手に包まれ、愛と恵みを十分に受け、永遠の命と喜びが与えられています。だからこそ神の都において、キリスト者は、天地創造の時に神によって神のかたちに似せてつくられたことを喜びつつ、神礼拝を続けます。主にある贖いに感謝し、その愛に対する深い信頼と確信をもって礼拝を献げます。

そして今、私たちが週毎に礼拝を献げるのは、ペンテコステの日に聖霊が与えられ、現在も聖霊を通して、私たちが神と深い交わりを回復し、罪の赦しと永遠の生命の約束を信じ、信仰が強められているからです。

私たちは今から聖餐の礼典に与ります。洗礼を受けていない人たちは、信仰が与えられ、共に聖餐式にあずかれる日が来ますように願いつつ、聖餐に与る者は、聖餐により、キリストの十字架の血と体を想起するだけでなく、神の都にあつて共に食する晩餐を憶えつつ、与って頂きたいと思えます。

「神を礼拝せよ！」

イザヤ書四四章六〜八節、ヨハネの黙示録二二章六〜二一節

二〇〇一年六月一〇日

私たちは改革派教会に属しています。正統的なプロテスタント教会では、聖書を重んじ、礼拝を重んじます。そして聖書に関しては「聖書のみ、聖書全体」です。

ヨハネは黙示録が信頼でき、真実であると語ります（六節）。このことは一章一〜二節に既に語っていたことの再確認です。私たちの主は「預言者たちの靈感の神」であり（六節）、聖書は神によって靈感された預言者によって記された書物です。この預言者とは、神によって召された聖書記者であり、黙示録では使徒ヨハネとなります。聖書を記す者は、自分の個性を用いつつも、自分の言葉として聖書を記すのではなく、神の御霊が彼自身に宿り、神の御意志が聖書の言葉として記されていきます。一点一画が、神の指示で、機械的に記されるものではありません。聖書は、神の御意志により記されているからこそ、信頼でき、真実です（ウエストミンスター信仰告白一章四節）。

このことは、単に黙示録だけに留まることなく、六六卷ある旧・新約聖書全体について言えます。聖書全体が、神によって靈感された神の御言葉です。ある人は、「共観福音書は三つもいらない」と語り、他の者は旧約聖書の律法を軽視し、またヤコブ書を藁の書簡として軽視する人たちもいます。しかしすべての書簡が神によって靈感を受けたものであり、否定したり、疎かにしてはなりません（一九節）。聖書全体です。

また聖書のみでもあります（一八節）。エホバの証人・モルモン教・統一協会の異端は、聖書を用いますが他にも正典を持ちます。カトリック教会は、聖書と共に続編を用いますし、教会の伝統を聖書と同等に重視し、聖画像なども用います。しかし現在、神によって靈感を受け、神の御言葉として私たちが信頼でき真実をもつことのできるのは、旧新約六卷の聖書だけです。付け加えても、省いてもダメです。

先日、富山で、イスラム教のコーランが破られる事件がありました。そのことに対しイ

スラム教徒は抗議運動を起こしました。「命よりも大切である」との声には疑問を感じますが、正典を大切に扱い、その言葉に聴従している姿は、見習う必要があります。また昨日夜、NHK・BS2にて「戒律に生きるモーセの末世サマリア人」が放映されました。サマリア人は現在六五〇人で民族を構成しています。厳格にモーセ五書の御言葉に生き、戒めを守っているが故に異教徒との結婚をしてこなかったことと、度重なる迫害が原因です。しかし、ここにも正典の言葉への信仰が表れています。私たちも神によって靈感された神の御言葉である聖書に対する信仰のあり方が、今問われています。

黙示録に記されていることはすぐに起こります（六節）。ヨハネの時代から一九〇〇年の年月を経ています。アルファでありオメガである神からすれば千年も一日の如くであり、終末もすぐの出来事です。

また私たちは聖書の御言葉を秘密にしておいてはなりません（一〇節）。黙示録は裁きの書ではなく、裁かれるべき者にキリストの御業の故に救いが提示されている書です。私たちに伝えていく使命が与えられています。私たちに問われているのは、伝道方法ではなく、私たちの信仰であり、御言葉に生かされる私たちの姿です。私たちが御言葉に生きることが伝道の源です。一昨日、大阪で痛ましい事件が発生しましたが、憎むべきは犯人ではなく犯人に潜むサタンの力です。また犯人の姿に、私たち自身の姿を見なければなりません。キリストの十字架の死は、まさしく私たちの罪を背負われての死です。私たちが御言葉に聞き従い、善き行いへと導かれるのは、罪の赦しの感謝からしか生まれさせていけません。私たちがキリスト者は、主イエスが今迎えに来られても良いように、準備し、歩み続けていかなければなりません。

#### 「アーメン」 申命記四章一〜四節、ヨハネの黙示録二二章六〜二一節

二〇〇一年六月一七日

約一年にわたり黙示録の説教を続けてきましたが、今日で最後です。改革派教会では六〇周年（二〇〇六年）に終末論の宣言を採択する予定ですが、黙示録を学ぶことは、宣言を考える上でも有益です。

今回は聖書の語る神はどういったお方で、また神は、私たちをどこに導いてくださるのかを、御言葉から聞こうと思います。

神は「わたしはアルファであり、オメガです。…」（一三節）と語られます。同じ事を三つの異なった表現で語られます。これらの表現は既に語られてきました（一章八節、二章八節、二一章六節）。神が無限で在られ、究極的な存在であられることを語っています（参照・ウエストミンスター小教理問四）。

主イエスは「わたしは、ダビデのひこばえ（若枝・根）、その一族（子孫）」（一六節）と語られます。ダビデの子孫とは、人となられた主イエスのことです。その方が同時にダビデの祖先です。初めから終わりに至るまで、父なる神の御子としての働きを続けられる神御自身です。神である方が人となられました（二性一人格）。そしてキリストの御業の中心は、十字架です。この神の一方的な無償の愛の故に、神と私たちとの間に初めて接点が生まれました。キリストの十字架の故に、私たちの罪が赦され、救われ、神の子とされました。

さらにキリストは「輝く明けの明星である」と語られます。私たちは、神の救いがなければ、死に向かつての闇の中の歩みです。様々な苦しみ・試練・忍耐もあります。私たちは自分の力で永遠の光を創り、希望を持つことはできません。私たちの生活の周辺には様々な娯楽がありますが、それらとてその場限りであり永遠ではあり得ません。しかしキリストが明けの明星として、救いという永遠の希望の光を照らしてください。キリストが、明けの明星として再臨してくださる時、神の国という光り輝く太陽が訪れます。その

時は近いのです。夜明け前です。キリストは「わたしはすぐに来る」(七、一二、二〇節)と語られています。私たちには明けの明星がもう見えています。ヨハネはこの光が示されているからこそ、教会に励ましの言葉を伝えることができました。

すでに二〇〇一年を迎えました。しかし神からすれば「すぐ」です(Ⅱペトロ三章八、九節)。神の民のすべてが未だにキリストの教会に集まっていないからです。従ってキリストの言葉に対する答えは、宣教への祈りへにつながります。

宣教は、聖霊が与えられたキリストの教会の努めです(一七節)。そして、地上にあって闇夜の中にあるすべての神の民に命の水が与えられます。夜が明け、神の御国が完成すれば、そこに集う者は神の命によって満たされ、渇くことは決してありません。

神がくださる罪の赦し・救い・永遠の生命は、神の無償の愛です。すると私たちは神の子にふさわしい者へと日々変えられていく必要があります。今日のテキストには多くの主

のご命令が記されています(七、九、一〇、一一、一四節)。これらの御言葉は、救いを獲得するための行動ではなく、すでにキリストの御業の故に救いを獲得し、神の子とされた者の感謝の応答です。私たちを救いに導いてくださった神に、心から感謝し、喜び、神の民が地上に満たされ、いつキリストが再臨されたとしても良いように、「アーメン、主イエスよ、来てください」と常に告白できる者でありたいです(Ⅱペトロ三章一〇、一四節)。